都名所圖會

前朱雀再刻

都名所圖會卷之五目録

前朱雀

八幡疫神祭　神宮寺　放生川　餌飼地藏
常盤地藏　狐川流　宿院　疫神堂
阿弥陀堂　下高良社　鳩峯　八幡宮
石清水　上高良社　琴塔　景清塚
細橋　新向橋　瀧本坊旧跡　御祭礼条　放生會来由
志水　正法寺　女郎花塚　淀姫社
大荒木森　浮田森　淀川　水車　夜舟
塚南社　秋の山　竹田　北向不動院
美福門院墓　西行寺　西行櫻　安樂壽院
冠石　景盤梅　鐘木町　墨染　墨染寺
墨染櫻　塚山　桃の名所　梅谷　梅の名所　源氏お羽旧跡

吹綵寺　瑞光寺　石峯寺　茶筅子　栗栖小野　少将通路　一言寺　長明方丈石　京橋舩場　槙川橋　三室戸寺　茶摘圖　宇治橋　朝日山　亀石　槙の嶋　猿尾山　鎧兜松　點汲圖　繁峯山金胎寺　塊社　玉川　蟹滿寺　一休和尚旧跡　狗留　當森　加茂社

泳帆　元政墓　即成就院　小野　下醍醐　笠取山　石田　豊後橋　小幡　宇治山　宇治川　通夜茶屋　惠心院　山吹　橋姫社　平等院　扇芝　宇治田原　百丈山大智寺　玉水　井手里　涌社　天神社　親原　海修山寺　清見河原

藤森社　昭宣公墳　那須与一墳　小町水　上醍醐　日野茶師堂　佛國寺　指月　弥陀次郎旧跡　喜撰嶽　山吹瀬　猪寺　興聖寺　中宿芝　浮舟嶋　鳳凰堂　駒麿松　黄栗焼栗林　久世鷺坂　諸兄公旧跡　光明山　北野神輿寺　綾喜郎　杭社　蚤仁郎　笠置寺

走馬圖　宝塔寺　桓武帝陵　柏の木　醍醐水　重衡塚　御香宮　清香水　六地藏　芙蓉山万福寺　宇治十帖古跡　橘小嶋濱　離宮神　琴坂　蛍狩　狗飼濱　行殿　縣社　信西入道墓　椎尾山　玉井寺　高倉宮霊廟　薪酬恩菴　木津川　國分寺　流圀　後醍醐帝皇居

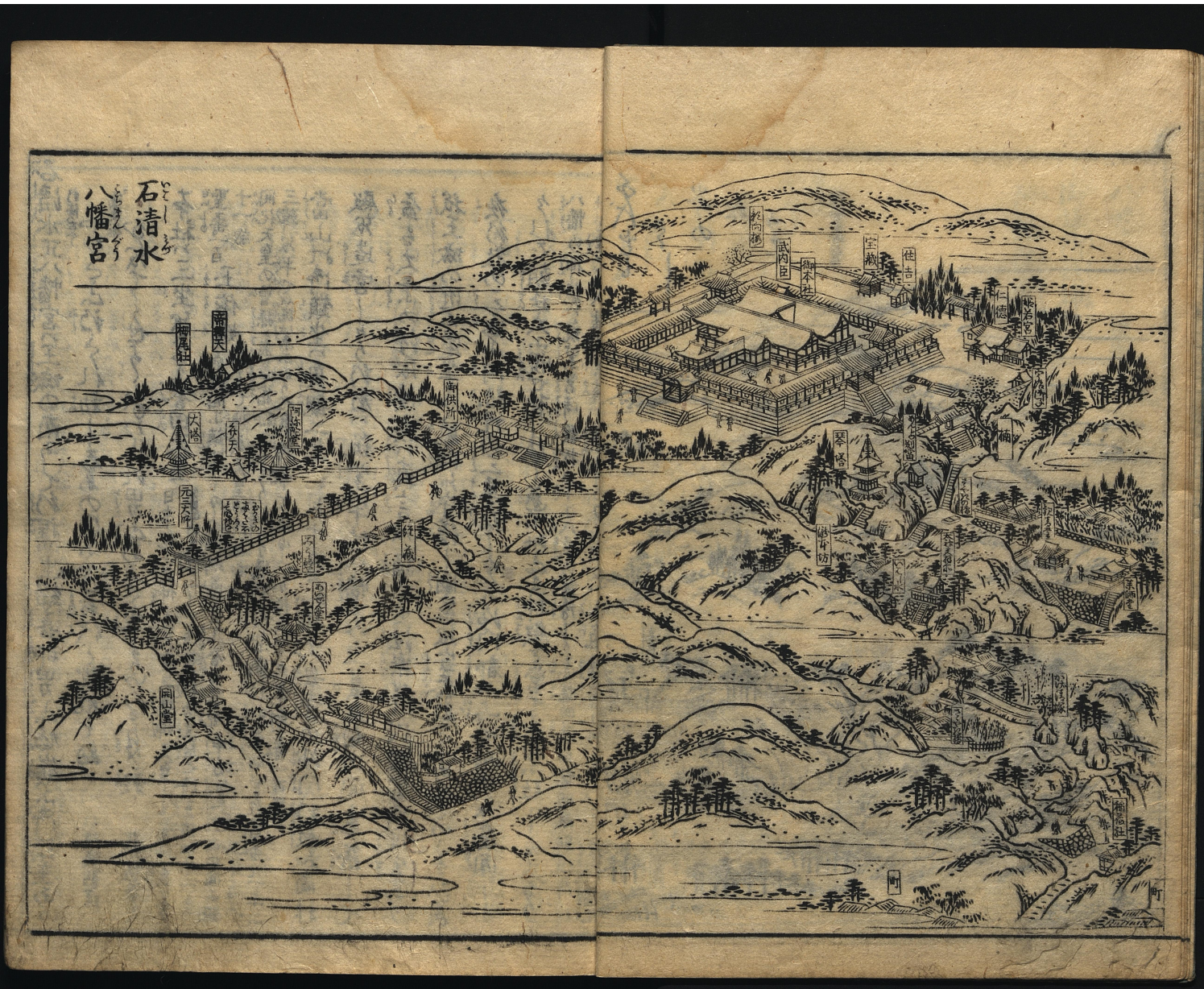
栗栖天満宮

やうやくふねりの下向
よの破魔弓毛鑓
るゐの武者仮求
て土産とろの神功
皇后三韓を退治
あつて御凱陣
はしくゆく遺
風あるべし




石清水
流の
八幡
神宮寺


八幡
御旅所疫神社
阿弥陀堂
新後撰
やくさん
さうり
神の
めぐみ
そ
武蔵も
さ〜
岑の
松
かな
太子堂
七曲
高良社
神馬
神田
川生越


石清水八幡宮
乾向梅
武内明
御本社
宝殿
供吉
若宮
南供所
大鳥
末社
元三大師
極楽橋
阿弥陀堂
開山堂
梅尾社
末社
若宮
末社
末社
末社

石清水正八幡宮の王城の南より約程四里級喜郡男山嶋嶺に神鎮座あり

やまこしろ初しあの男山松風ぞ絶ず　後鳥羽院

あなてらせうふかうしに男山あくる春ごとの影

本社の三坐は誉田天皇　日本紀に足仲彦天皇と見ゆ仲哀天皇の聖壽一百五十一歳　息長帯姫尊の間に鎮坐しまします　神功皇后　西の間に鎮坐しまします　武内宿禰の間に鎮坐しまします　比咩大神　宗像三女神　天照大神の御子にて神功皇后の御守護神なり　比咩大神　宗像三女神　天照大神の御子にて神功皇后の御守護神なり

十一歳　風化天皇の曾孫と息長帯姫尊のなり聡明賢智貌容甚美にして當帝に一年ふ三韓征平て筑紫に在て應神帝を生ませ給ふ　神功皇后　西の間に鎮坐しまします

當山は神鎮坐の貞観二年六月十五日和別大安寺の沙門行教和尚神殿を造営しより行教筑紫宇佐八幡宮に一夏九旬の間参籠して

靈を大乗の経を読誦し真言を誦して法楽せしに八幡宮御託宣あり

我王城の近き遷坐して国家を安泰にせんとのたまふ真

夜行教の二ヶ所阿弥陀の二尊現しまします沙門都に上りて此由を奏聞し

ければ朝廷大に悦ませ給ふ此ところ神殿を営て永崇敬しまします

八幡の神號を蒙ふる赤幡四流白幡四流則ち此山に

垂跡ありしより両部にして当社を行ひ給ふ仏菩薩と

ぼ〳〵ありしかば唯一の神道にて法華経を読誦

とうり一鳥居　松花堂より下宿院まであり八幡宮の額は佐理卿の筆なり旧扁

二鳥井　七曲の　大師堂の前にあり石柱に銘を勝正保二年正月従四位下行信濃守大江姓永井尚政と刻る

若宮　仁徳天皇　若姫宮　宇遅姫皇子　水若宮　宇治の皇子

上高良　武内宿禰の左の御子にて蔭二百十餘歳　下高良　藤大臣連保の孫にて神號を高良玉垂命と申す人千歳の両顆をのこす

奉行一ノ人故あり　石清水　本殿の巽の半腹にあり

王出ら号こと　儀ふの石清水権現社あり

松とねひみを海むと石清水いまに絶くつきまじ　貫之

神やらやけとも名宗ふ石清水きよきを代まそく　為家

楯樹　神殿の前にあり　弥向楊　西の回廊の外にあり　楠　東回廊の外にあり

安宗別當社　安宗の霊を祭る

大塔　大日多宝の二塔あり　琴塔　毘沙門天を安置の軒の四方に琴をかけて風鈴の代りに

像阿弥陀佛等祭る　薬師堂　護国寺より当社を鎮座以前の薬師の

祭る所　八幡宮神殿の左二大師堂　大師の御影は弘法大師の御作にて

行基菩薩の作なり　左の堂　しかの南妻仏の　阿弥陀堂　愛染堂　盛隆

夜盡堂　一劍居の南廊下の内にあり。所八幡宮御遊祖之霊祝八正月十九日一日の執行と延喜式に出。山城と石清水の間に要神松あるによりて世人正月十八日より十九日まで當山へ登詣して其年の災難を祓ふ。又士庶ともに將軍の礼日に作祓魔弓毛遣等奉求めて家内を祓ひ鬼気退くなり

本地堂　夜叉堂の西に隣る。極楽寺と號す。本尊阿弥陀佛脇士観音勢至と安置たてまつる。本殿の御正躰なり。堂前の鐵燈籠は豊臣秀頼公の寄附なり

細橋　八幡住吉の二神影向あり。所謂なり石を布て橋の形をなす。御参詣の儀は伊勢を祢宮遥拝所なり

宮本坊　行教院と号し殿舎いなの瀧本坊　石清水の僧なり。松花堂と惟を羽人にして書画ともに今茶屋ふ風山堂　行徳和尚の像安置す。本尊大仏の像放安置す。真名の額僧正禅助建立。景清塚　平家の侍士悪七兵衛景清主君の讐を酔へんし所小蝦冶宗近と鍛しなり

稲荷社　名剣と鍛しなり

大菩薩院　宿院科手の間にあり。當山の神宮寺なり。本尊八十手観音安置たてまつる。神殿を祢功皇后始め奉り応神天皇仁徳天皇明王を右左に安置たてまつる。興聖菩薩

足立寺　本殿の西にあり。むかし称徳天皇の勅願寺にて鏡普光を勅使として宇佐八幡宮ふ御参詣ありしに清丸上洛して不在なるに道鏡怒りて清丸の二の足をきりうしなひたりしかば清丸を負て神殿ふ参詣ありしに宇佐の池より五色の小蛇出て清丸が腫を舐ふ二の足もとのごとくなりしかば社頭より五色の小蛇出て清丸が腫を舐ふ二の足もとのごとくなりしかば清丸

清水寫井
福井蔵井

三善法寺　當山の祖坊にて二ヶ寺あり。若法寺新名ばう寺赤井等之具所圖あり

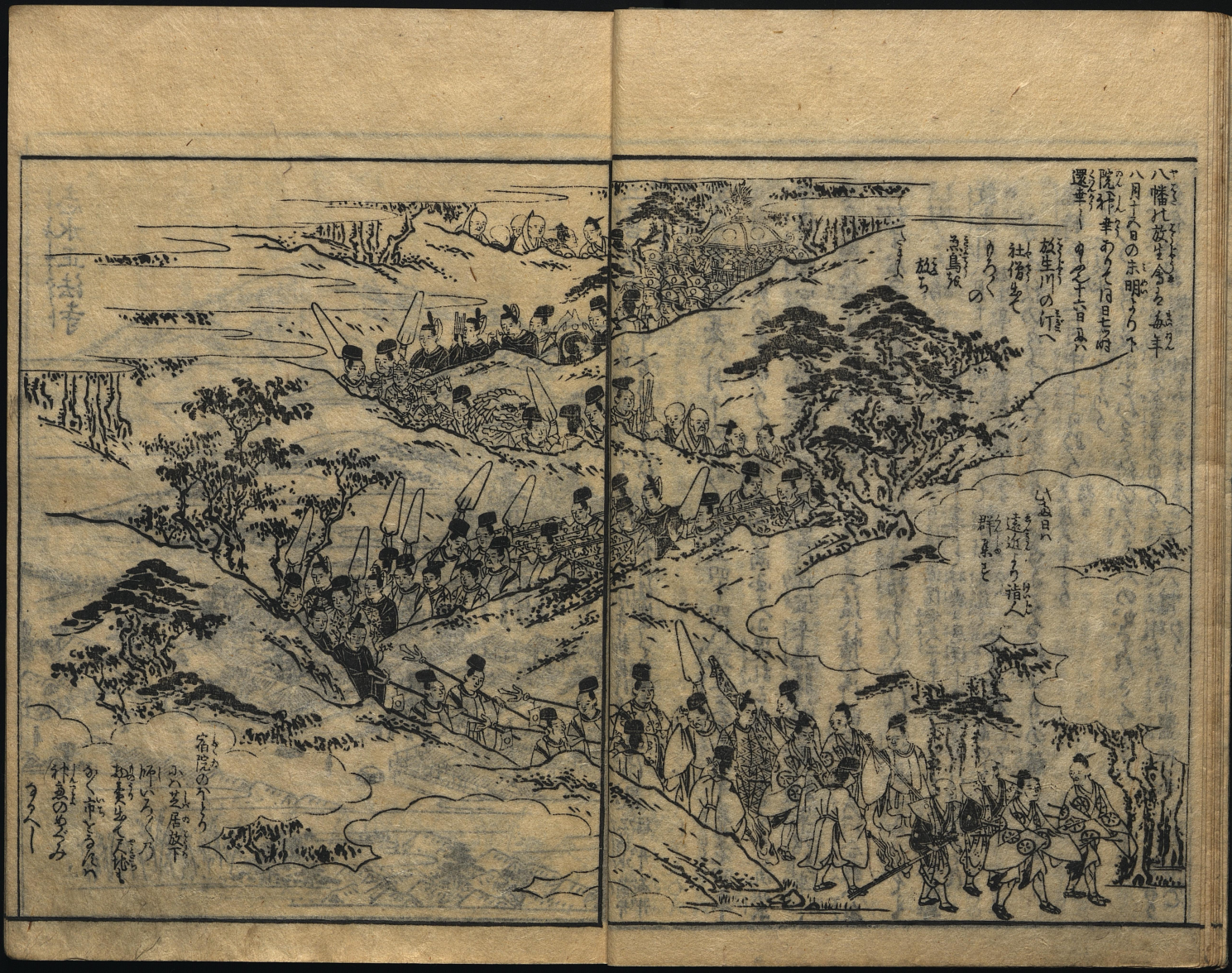
放生會　八例年八月十五日なり。人皇四十四代元正天皇御宇養老四年九月ふ征夷の事ありて大隅日向の西ふ大ふ逆乱と故ふ内裏ふ仏業宇佐八幡宮ふ御祈誓ありて其宮れ祢宜辛嶋勝波豆米祢軍ふ率てうれ國ふ征ふしめらる。歟て亡くなり具ふ八幡の御託宣ふ云く我ふ合戦ふの経ふ参ふ間お安ふ思ふべし祢勅まくをを法ふ思ふべしと御くらゐ始まり　扶桑記ふまをくらゐ後二條院延久二年八月十五日より上卿二條の鳥羽院ふ御幸小雨にて祢憲ふ應誕一の宮ふ参詣ふ放生川八月十六日放生供養ありて高橋石橋と安居橋南のこと

男山社　のくさや繋ぐらんのぞふるりよりの鎌　定家

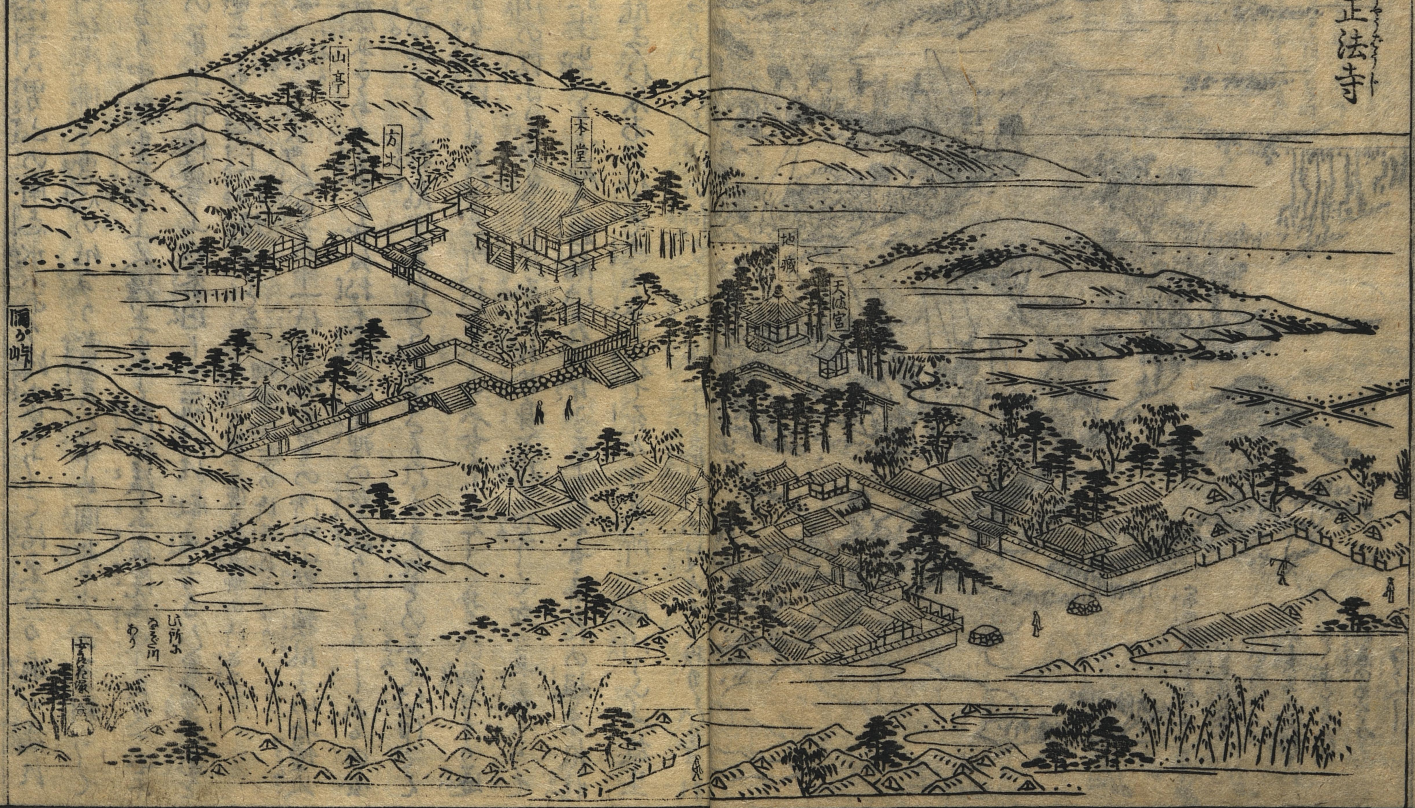
臨時祭　二月中午日なり　天慶元年より始まる

餌飼地藏　小野篁の祖父金昌寺の内ありうつくしき地藏尊ありて放生川ふ餌をあたへ給ふ

若宮八幡社　常盤地藏　八幡の神使


八幡より放生會の御幸
八月十六日の未明より下
院神幸ありて日も昇
御幸ハ
ゆるや十六日ハ
放生川の行へ
社僧を
はじめ
の
鳥居
越ち
遠近より詰人
群集
宿院のやうす
小芝居
おもしろく
ハやいろくの
おまつりて
賑ひ
外題のもくろみ

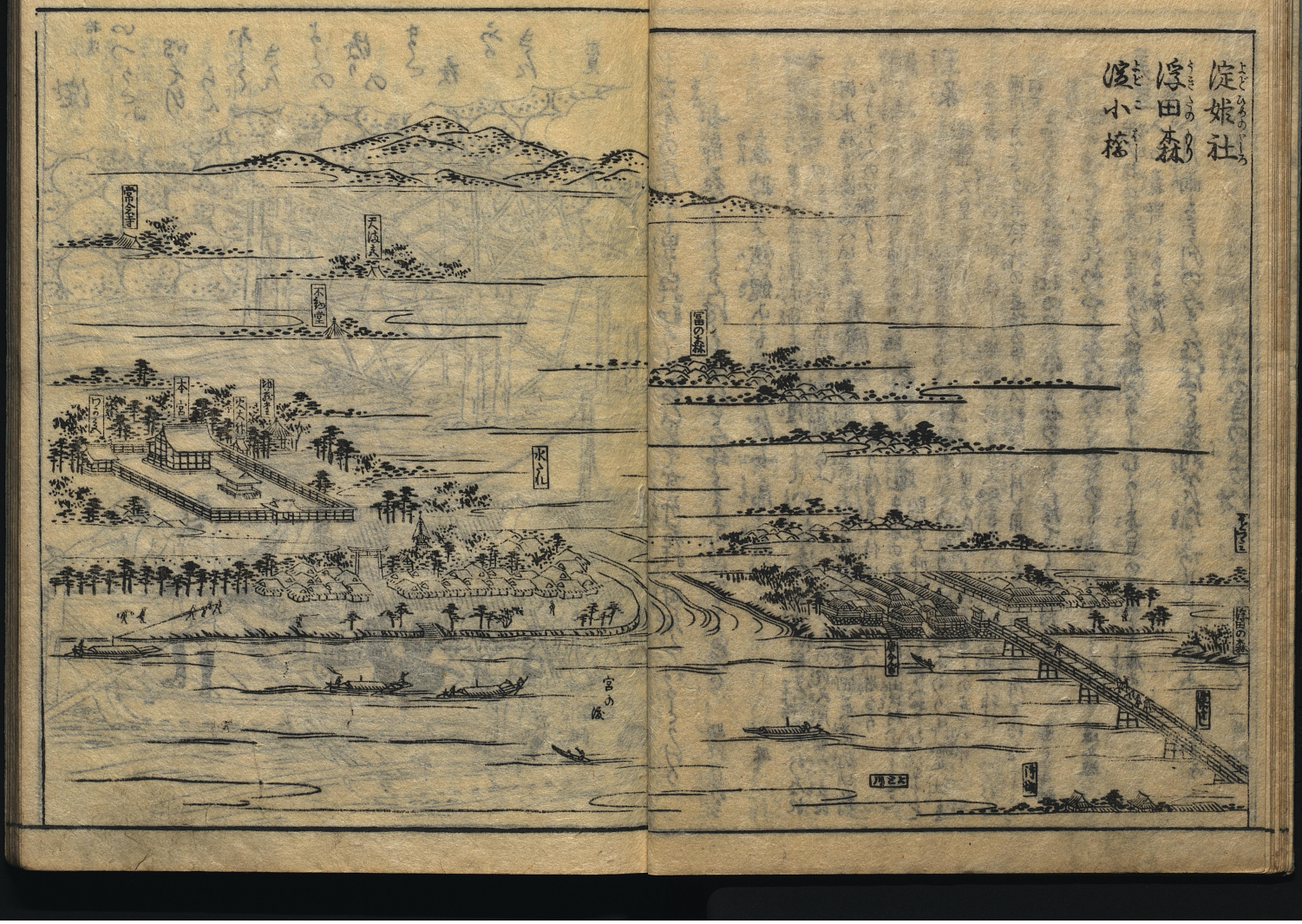
志水正法寺



徳迎山正法寺は男山の南志水にあり浄土宗にて洛東百万遍に属す
本尊阿弥陀佛を恵心の作なり當寺ひろめ圓誉上人の草創にて
天台宗なり中興聖誉上人浄土宗と改む後奈良院御宇天文十壱年
ふ當山の第十一世傳誉上人桑田に説法に感ありふるし蓑笠を
給ふ故に蓑笠山と号す
境内に徳迎ふくあり 真上勅額寺とる 屋形大納言源義直卿の御母公
殤ノ唐門の額 相應院殿の御菩提所なり
女郎花塚 志水の南八町 人皇五十一代平城天皇の御時小野猿丸
男山の麓にあり 系ふ女郎花連理の契ありしかふの女
ハそくふ人ありしそ於風が事なりしかどもその名て山ほどと
ゞめくる女房ねまちが其所へ行あそひ女ふ人ありしが胸せまり遂
に放生川の堰ふ投しかさの衣ぬぎ捨身を投て死しくあの其衣くちて
女郎花生出しるしより於風此花のねふさんし女郎花の根ふ風情
あり猿風さて後おのれそ共ふ身を投て死々り其所を猿川と号し放生
川の上ふりさけ漢の何文が女化塚ふ女郎花のはなるもはりふさん

古今の序ふも男山にれむらさきひいて女郎花我一時にくねるとけり
古今
女郎花ふしくれはくゆるとなくてそ
班婕妤
衣おりし錢魄ふもあしび女郎花

如法經塚 男山の西ふ桓武帝王城鎮護として心右掛 志水の南天神森ふに
四方ふ經王を埋りし所を南岩藏ふ
河水掛ふ傾りゆくしの名 美濃山 志水の異ふあり傾多羽院の愛妃美濃局し所
あり土人の口称りり
洞ヶ峠 八そくの西ふ里ふあり高野街道 志水の南ふり西の田口村へ通ふ道之
境内の塚を南峠ともいふ
王塚 志水のふり一丙里ふのふあり岩田やくの一里塚ふあり
總體大皇の陵ふりとふ
合のふる山門の石田ふ添ふ醍醐の南ふり延喜式ふ八世那石田の神社ふいわゐ
兩所ふ号をふり宗祇八拾の通宿の再ふ阿ふ科を用ふおふりて其所を詠ふ
詞花
ふもろの石田の杜のいそくもふのふりなくて七月のけ 藤原為嗣
ありそそれ彩やふそれそのをも名ふりそ
美豆 淀大橋の南瓜の里ふり大坂街道ふりて むつ美豆の清水と厩あり
入江 森野 おふの ふん
久月雨ふそれのみそれはふも芒刈やふ傳ふしそそ さごみ
胡ふくろの上野ふ刈茅のきのふの約を且ふり侘く 順徳院


淀姫社
浮田森
波小橋
富の森
天満天神
不動堂
本宮
水ノ江
宮の渡


淀
拾遺
いつそこふ
鳴そりらん
ふしみ
きん
よこの
渡りの
まこ
夜
うら
きん
忠見
淀の水車へむし
よりありそ耕作乃
たあふとき秀吉公の
豪淀殿ゐ仕給ひ
あひより城中乃
用とうん

淀川を五箇庄の大河をわたりて古圖より水ぐに歸舍に　山城　近江　河内　伊賀　丹波　攝津

河水をはるかに浴々とながれのふるびわたく雜沓津へゆきつゝ舟をわたりぬれば

くるまもおびたゞしく城郭の江ぶみも水車ありて波ふき翻々とめぐる領主の茶亭橋上のゆきゝ賓客蓬々としてくるまをとゞめ

いこふおり　城多く用もなき故ぬ常に遊獵の設橋ぶに　新古

のりくるまもとゞまりて淀の河流れ見るに　公衡

風雅　五月雨ふる岸の青柳枝ひちて猶を洛をよろこぶの河ぶち　俊成

土筆　さゝ掉も及ばぬ水ぶかをそゝに淀の河ぶち　冬俊

淀の大渡いまは本津川市牧の西より小流を宇治川に合して舟渡しあり

大橋　本津川のまより宇治川に架す小橋　宇治川佐良の澤等の下流にかゝる長サ七十間ぶ

のけ初し

淀姫のやしろ小橋の西ぶありまつ神いと坐まして中央ぶ淀姫神

五尺許當社を千觀法師の勸請ありし所の春日神社の西ぶありしを宇治橋ぶ文明年中移安

廿三日神輿一基あり　宮の後ろを當社の參詣の人宇治川を渡る舟の小橋の下を通ぜざるの舟ぶ

來朝のころ大坂より舟にて唐人風流とゝのへ胡錦人物蓋袖統蜜ぶ

ゆきゝし所より陸地なりふ天神口船を繫ぎ上陸ぶて宮の社あり

大荒木社　いまはやしろふあらずと

古今　大荒木の杜の下草老ぬれば駒もすさめず刈る人もなし　後撰　讀人しらず

大荒木の杜に茅ぶ成ふりぬるふるそでぞかなしき　忠岑　新古

郭公きなくなるなる大荒木の杜をその名の杜ぶ　信明

伊勢向宮　小橋のむかひまあり天照太神を祀るぶ所

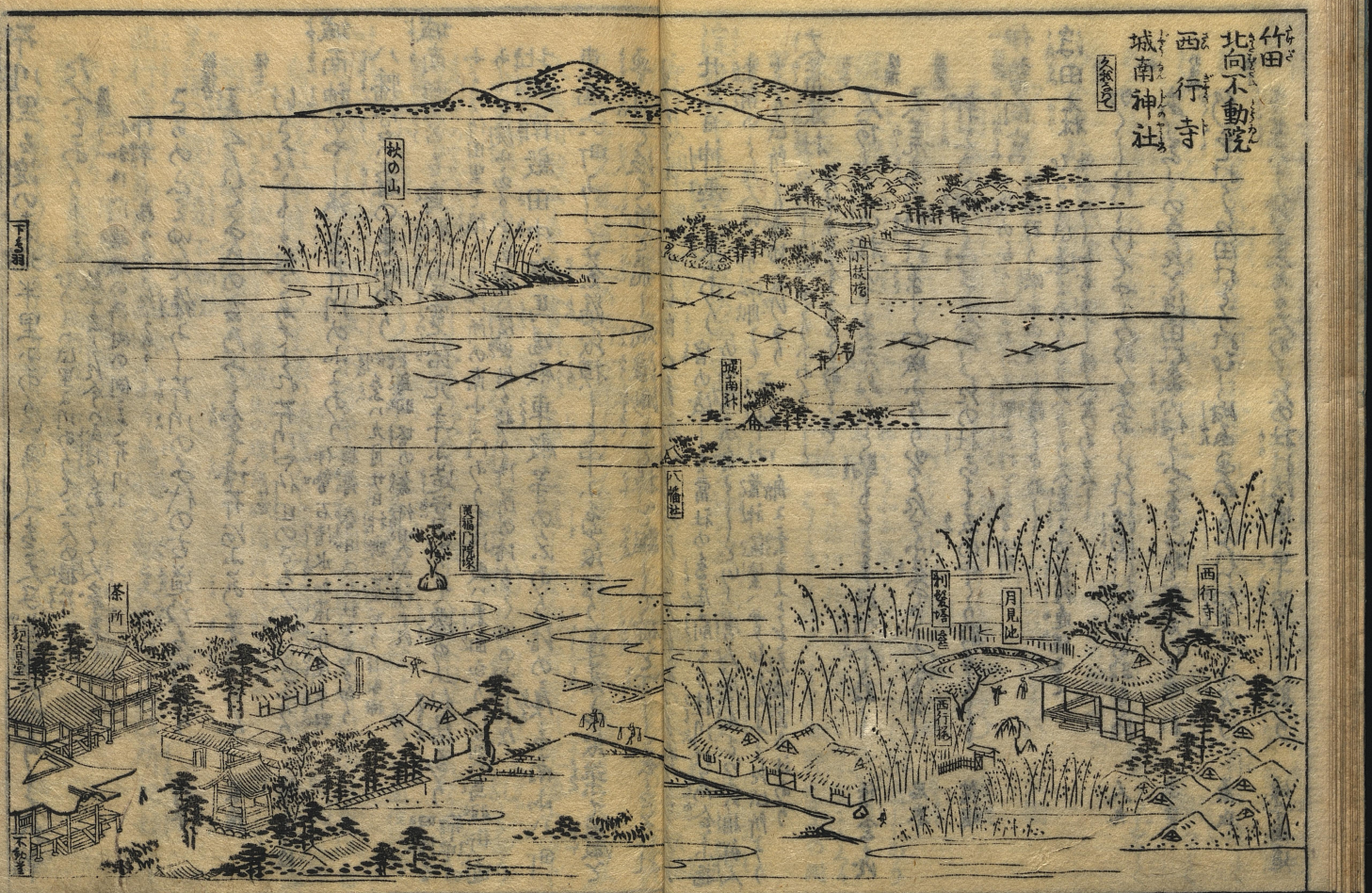
淀渡り洪水の時と淀るゝ所

淀田森　森合せ一町ばかり　新古今　ありあけの月をまつ夜の淀田ぶ秋風ぶ

金　あしたづのなくねを淀田ぶ葦小笹ふきなびく秋風ぶ我ぞまされる　人丸

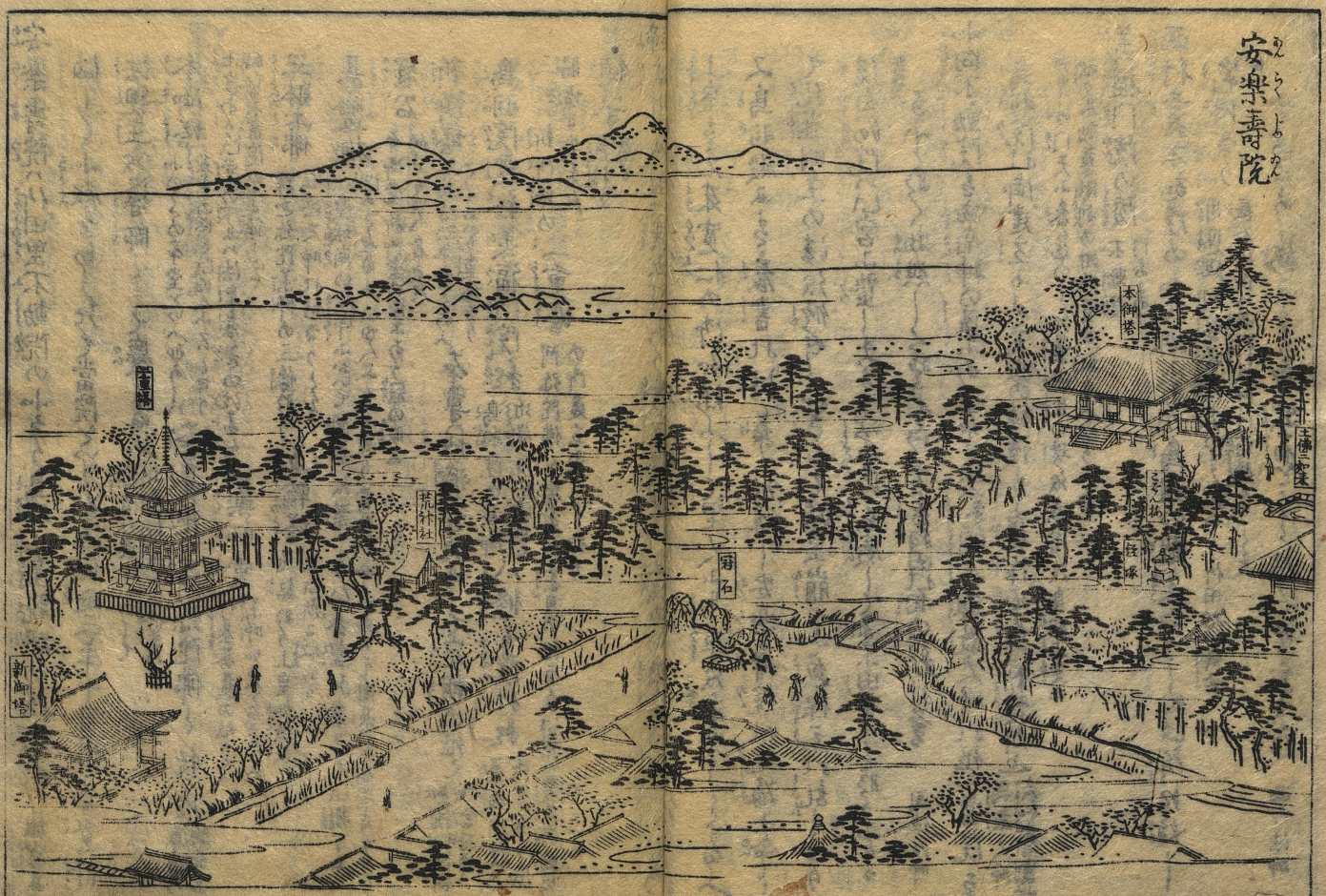
新古撰　刈ほせる田ぶをとりもむ鴨のねもうれいなく聞ゆ　為実

續千　下葉ふりぬる木ぶ木ぶ大あらぶの杜ぶ淀風ふ早苗ふりぬり　業氏


竹田
北向不動院
西行寺
城南神社
秋の山
小枝橋
城南社
八幡社
茶所
月見地
西行寺

芥川里を淀の東北半里ふありいまへさき天子遊猟の地あり
たえとあり〳〵ん　むかしハ山里ふりありて三人の根芹生ひ
故ふるき人今の民ねくありそ人家もろし
後撰　仁和御門猟職の御時の例とて芥川ふ
行幸し給ふ時よめる　行平
さのみやはゆきゝえぬ身と芥川のみぎの古道ふ
新後撰　家隆
思ふれとも氏の古ことゝ遠芥川ふみ葉掃らん
後撰　読人不知
けさたふもよ紙こそなけれ芥川や竹田のさと人つかふらん
城南神のやしろ芥川の小ふあり　伊勢石清水加茂松尾平野
稲荷春日の七社と称す
八幡宮ハ森の東ふあり　例祭ハ九月廿九日と云二基あり上鳥羽
下鳥羽塔の森竹田の氏神なり
城南離宮ハ鳥羽上皇寛治元年ふ造営ありて墨の人仙居ありし
ふより竹田里を限りて御所の南ふ門ありて御殿ハ東面なり門前ハ鳥羽
芥川の街道
ふして淀ふ至る今の道ハ後世ふなりし所の地多く田の字ふ
北殿　南殿　田中殿　馬場殿　車殿等の名あり此の辺を南小八町
東西六町ふして蒼海ふ模して中ふ島ふ作り蓬萊ふ仮築て巌を
畳ふ石を立て滝を流し　同良剛ふし卓と風して淀と下しふ注ぎ入れ
流ふして月ふ船音楽ふ奏し秋ふハ池水ふ月ふ浮ふて宴客秀源と吟詠
上皇ふ応ふて茶寛仁の御ふ源ふして里人ふ牛車ふ永ゆるしふ
又鳥羽殿ふも震書れ法華ふ供ふし安楽寿院ふ定海ふ命ふ
て孔雀明王の法ふ修せしむされハ法皇崩ふ臨ふ勅ふ
後白河の院ハ宮ふ帰ふ玉ふより後ふ荒廃して畠ふ田ふ変ふりぬる
新後拾　園位法師
ふふしおもふ物ハ〳〵なけれとつくる名ハ田面の秋の雁
小向不動院ハ城南神の艮ふあり本尊不動明王ハ興教大師ふ始ふ当院を
鳥羽院ふ御建立ありて王城の鎮護ふ宝祚延長ふ勅願所ふ興教大師
信覚山
の是沙門天ふ奈良の一ふ最遮生の珠ふ感降ふ鳥羽上皇ふ
南ハ不動尊脇侍の旧像ふ祀りぬ
美福門院の陵ハ不動院
門ふあり
西行寺ハ不動院の小西側ふあり鳥羽の離宮ふあり〳〵時ハ所ふ姫
円明寺　淀川　納涼　塔　家ふ人ハあり竹田村の郷士
長谷川氏ハ西行法師ふ苗孫なりしそ
宅地なり
新古　ゆくとくの一枝ふさりあるハ我者とうらふ花ふ折りかざゝん

安楽壽院

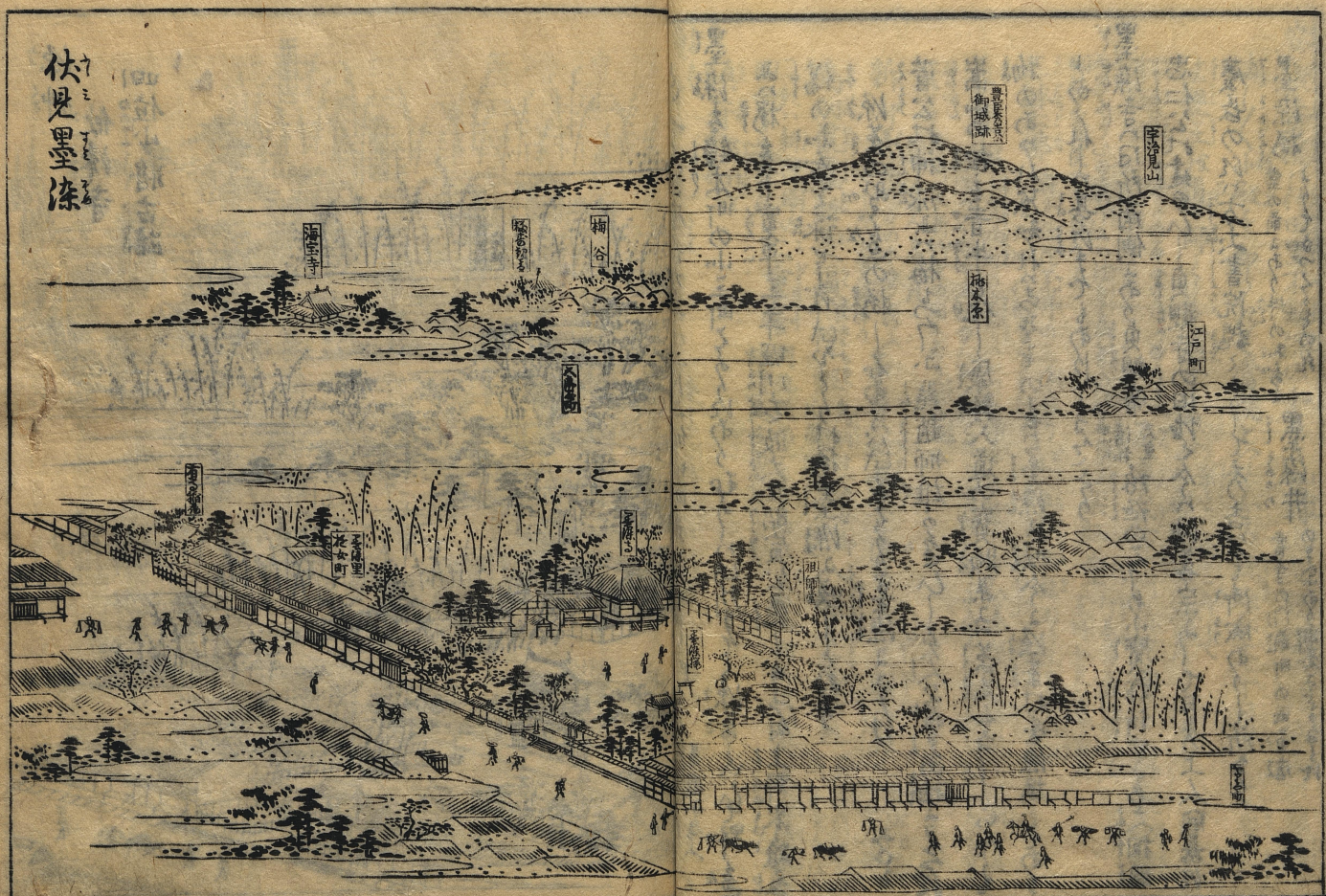


安楽寿院ハ作田里不動院の小うち鳥羽上皇脱躧の後城南の離宮ゟ
はしく小殿をうつして當院をいとなみ保延三年十月十九日供養を行
法親王ゟ導師にして慶讃の
本御塔 小のうへの本堂とひとしう本尊ハ丈六の阿弥陀佛と称ス 導像ハ胸前ニ
五重の塔ハ法皇崩御の後建立ありし所なり 古義新義ともに修之
卍字ありし堂の下ハ法皇棺納の地ありと 薬師堂 行基菩薩の作りの
称むる本當院のまゝ鎮ゝとを 薬師如来を安置
三躰土佛 釋迦弥陀薬師の三像なり 五輪塔 無銘なり上皇如法経
弘法大師ゟ給ハりしとぞ 所ゝ埋ム
碁盤梅 上皇城南の宮中ゟおいて圍碁ゟ禁ゝのとき碁盤ゟ集へて樹下ゟ
埋めさせ給ひしゆへなりと當院ハ今ゟありて圍碁ゟ禁ゝなりと
冠石 本御堂新御堂の間ゟあり冠の形ゟ似ゝ名ゝ
新御塔 南の方の本堂をゝ本尊ハ地藏菩薩にて定朝の作 院の
そばゟあり五重塔なり 念持佛
鳥羽院 震筆美福門院ゟ 鳥羽院の女御 美福門院ハ
近衛院の御母之 八條女院ゟ 御子なりし
三躰の新御塔の二重塔 阿弥陀佛を安置 玄旨の作なりし塔ハ豊臣秀頼公
脇堀ゟ安置 荒廃と
鎮守 なる

童大明神 旧記云 仁安元年十二月ゟ傾城町免許ありし所なり 荒廃ふるゝ

墨染を鐘木町の小三町そのうちにありむかしハ所ゝそも染ゝしにて野ゟ遠
み橋 多一實平三年堀川左政大臣昭宣公薨ゝ給ふ上野ゟ雄長
傷の和ゟを詠ぜられしゟうれ橋墨染を咲しとなり
今 染ゟの形ゟ亀の橋しゟありし墨染ゝうけ
菅公ゟ神詠ゟあり梅ゟ小飛越師雄ゟ逢ひしゟ美人ゟ寝ゟの花ゟうつゝ
嵩山の松ゟ青牛ゟ化し康頼入道の寶物集ゟ苔ゟ水ゟうつしいつも
物のあわれ知れゟ花をその春ゟ墨染ゟ咲今ゟ染ゟ墨染橋ゟとあり
とのゝしゟ真ゟそもありしとぞ
墨染寺 日所南側ゟあり奥観帝 清和天皇 後胤のそゝめゟ寶祚祈のゟめ大相國
忠仁公ゟ建ゟひし奥観寺の旧地ゟ今ゟ法華宗ゟして日秀上人開基ゟ
慶長の頃ゟ方丈書院襖ゟとゝして秀吉公ゟ聚楽ゟ城ありし所ゝ
墨染橋 堂の前ゟあり伴のおゟ より おづくりの石 墨染井 當寺の門前町の西ゟ染店のまゟあり町家さゞうつ

伏見墨染




源姓
佐渡寺
四位少將古跡
竹の雪山
少将塚
小川塚
手洗水
名時の石碑
本堂
門

依浄寺は墨染の南にあり浄土宗にて本尊は阿弥陀佛弘安元年作と傳
聖徳太子十六才の御作と云ふ山門にみえし源仲お将の墓地なり寺記に曰く四位少将源茂之純三義平
十六才の御孫卿の長子にて母は義宣卿の女なり仁平二年二月十六日討所にあらず
弘仁二年二月十六日討所にあらず お将の塚小野小町の塚
本堂のうしろにあり
墨染井 此の辺小野小町の旧跡の内にあり
深草の里へ行道あり 此の道を通り伏見へ出る道元禅師の石像あり
道元禅師入宋の
伏見所々へ行道筋 七瀬川 高塚 石像あり
竹田下道 竹田の
源茂の竹の下分をそうこんのしるし有り明朗 前関白秀吉
藤杜やしろ 此の墨染の小高き所にあり本殿は中央に舎人親王 左に早良親王
西に伊豫親王 此の三本朝武功の神と配祀す 神武天皇社 功皇后日子坐王
我朝の宿祢多きが故に号無数所と號
舎人親王 天武天皇の皇子にて天平寶字二年に追尊の号を盡敬
皇帝と號す 日本紀を攷るに
寶龜年中勅ありて 仍て五月五日を以て奉幣奥狄を
征罰ところの兵二帝八年 天應元年に墨國の蕨古日本へ従来らし
ばへりんじ天皇を皇子の早良親王を大将軍として退治ありしより
宣旨を給る親王當社に祈誓して五月五日出陣しより神威いちじるく忽暴
風大に吹来て蒙古軍船沈没ひしかば吉剣ふるひ奮戦軍陣
の内を天下平安に鎮しぬ當社を号兵政所の大社所謂ふるしもの
旗塚 本社の西にあり神功皇后三韓 蒙古塚 當社の中に七つあり
退治の後旗竿を埋めしと云傳 今傳
宣旨を給る親王當社に祈誓して五月五日出陣しより神威いちじるく忽暴
風大に吹来て蒙古軍船沈没ひしかば吉剣ふるひ奮戦軍陣
の内を天下平安に鎮しぬ當社を号兵政所の大社所謂ふるしもの
源州野は藤杜の森の内にあり大亀石あり 竹田里南にあり深草小稲荷
と混るもの 欽明天皇いとけなくまします時 異化人来る君臣
秦の大津父なるもの政求て補佐し天下安泰に有りて皆々
従ひて曹司ふせの客が圓して 深草里に住る是
浅連て朝覲し天皇践祚の時大藏卿に任じ四夷靜ぬ
く日本記ふるけり 桓武天皇の後ろ東の山本谷口の内所にあり 車
塚 天皇社 清車放埋し所 御藥塚 鎮守松殿の谷 霧の谷

源草天皇元建のしゝ嘉祥寺も今は嘉祥寺畑と號て字にのみ殘れるの
塔は元慶八年ゐ建られしく近ごろ毀れ國寺百五十六解丹波の國寺二百七十
九解ゐ貞觀錄十二貫文勅して毎歳ある二代實錄ふみとゞめ仁明
帝孔陵同女御貞子の墓あるは左大臣冬嗣公の別業大納言時継卿の
莊眞幡寸社拜志寸大日寺後深草院の後昭宣公の営ゐ人極ふるも
今は里のさとおりて遺れる源草の郷中は高貴れ別莊名賢の古
廟靈佛の寺院いとくおしきよも千載れむうしとうりて村老れは
称ゐのこと聽め桑田碧海須臾ゐ改くしかとうれてするなべ

源卅の里の旧都さしも後ゝ海れ賀人乃社風 通具

いくよゝりみそ人のゐ絶て稀れば雪乃源草の里 爲氏

源草や昔の雛さくれ住て荒ゝ里ふ衰ゝりあり 雅經

鶉の床ゐ源草野の叢小菜多くむさりて

山野ゐ鶉の床ふ所一所ある作れ茅ふの
動ふ後世をおふそろ〳〵ろことの名

むさゝりて鶉の名所ゐ人の住ふ傷しくとりて都下の閑客中伏

の須ふくゐ求りて安藝坂開ぬりて鶉のあれこゝ野ゝ鳴ものし猶ゐ鶉ふく
多れゐ鶉の床も多そ名のこるこゝろ
源草ふ鶉ゐ取合てふ人ふその他例ふし

夕さゝれゐ野ゝ亀の杜風身ふそ鶉ゐくこ源草乃里 後鳥羽

源草の古のさ衣ふく濕ちふ夕風ふさえうゝ〳〵帰ろう 雜熱法師

源草やうゝれ床ふ汚絶そ荒れ果ゝ人當のこゝ名 従二位權僧都

奥山 源草のおうれふ知人 竹葉山 野の内ゐあり安樂行院の

ぬゝくゝゐ竹ゐ葉ふの多多みへそみへゐ鶉るくうう 家隆

安樂行院ゐ源草野ふあり法華三昧ゐ道場般舟院ゐ傍ふ本尊ゐ不動ゐ歡笑
の二尊ふ祝安ゐ堂前ふ後陽成院の御廟あり

真如院ゐ安樂行院ゐあり浄土宗ふて源卅流義れ本山ふり
本尊ゐ阿弥陀如来ふて御基ゐ園空上人ゝ

藤森社



藤代森の祭は毎年五月二八日ふして當社の神幸蒙古退治ゝ為出陣しるへ日より宮宮より神前ゝ鐘ゝ鉾てふの日ハ一族稲荷の森ふく胴ゝより走り駈あり

世ふ端午の佳節ふ武者人形をもてくらい蒙古退治の吉例くらりぬる





瑞光寺 元政法師 舊跡



瑞光寺は深草極楽寺村にあり佛殿の本尊は釋迦佛長丈六餘中央に明暦元年に元政上人草創ありて法華道場とし自ら焼肉の修羅を彫刻し祖師堂に安置し古へ極楽寺の遺構なり

元政墓 佛殿の西にあり塚の上に竹垣植ゑ改法師常に掃ひ給ひし竹の杖なども埋もれり

道の記え政旧巻にて

さのゆ門日まふれと常の佛れ

たに親あのみふくくんくくく

寶塔寺







百丈山石峰寺

深草山寶塔寺の瑞光寺の北うら法花堂ありて本堂ハ釋迦多宝の二尊の高祖
日蓮上人の像を安置し廟塔ハ日像上人のかゝり題目の石塔婆ありそれ下ハ
日蓮日朗の遺骨收むる宝塔と　日像の說法石ハ釋迦千躰堂の内ありて鎮
守社ハ二十番神を祭る七面明神社を本堂の後ハあり是經寺ハ擁護の社と
永仁九月之鳥居の額ハ元政上人の筆と當寺ハ舊趾なりて真言律なれ共
延慶年中に住職良桂律師日像上人の教法ハ受て法華道場と改む
百丈山石峯禪寺ハ宝塔寺の小僧ら開山ハ芙蓉の二世千呆和尚と
佛殿ハ釋迦佛額ハ濟世法王又九右ハ聯ありハ共ハ千呆の筆ゝ表門の額ハ
即非の筆ありて高着眼と書ハ
薬師堂ハ佛殿の前ハありハ本尊薬師佛長四寸惠心僧都の作ハて多田
滿仲公の念持佛と村上帝ハ宇天徳二年ハ攝州多田郷ハ始めて滿仲公
伽藍造営ありて此羅連山石峰寺と號しハ本尊弘安元年ハ其人後文永
の役兵火のために諸堂回祿ハ及びぬれ共其像ハ石窟ハ収め申ハ暫ハ

霜皇累りて慶長元年の春沙羅ふ夜光あり鄕人奇しみ其光の在を索るに一の石あり得たり蓋し沙羅連山石峰寺某師の銘あり則一宇故営て安置し日々香花を供養す其中の霊告あり那近所寺院遷し安置し普く民を化益せんと宗玄佛意を得て自省ふ処多故小堂より五条にうり国幡堂小斬安奉し祈るに五條の橋東若宮八幡の勢ふ堂舎を営んで石安置寺と号し宝永比当麓千呆和尚常ふ此寺に頂て薬師堂ふ尊信あり乞て曰我異国より日本へ渡り芳躅ふの祖席ふ司徽とる事偏ふ霊佛の應祝あり一宇を創建し給へ願ふ腋禮恭敬せんと乞ふ公命あり

今れ如く百丈山を移し其像を刻し石峰寺と号す

茶碗子 醍泉の絵ふ當寺の門前南のくにあり

柔の湯ふ可あり一人ふれ仮賞ん

即成就院ふ添草れあり一大亀谷ふあり本尊阿弥陀佛の坐像ふ脇壇ふ二十五菩薩一ふ恵心の作ふ霊像ふ恵心僧都慶嶽拵ふ給ひて説法一ふの姿

其人の花翁あり乞れい那比南佐見里ふ住そのこと一酔を捧んと年仮そふ恵心其詞ふ應して伏見ふ至り椿月のかーりれ帰路より翁ふ之の仏間ふ滑し極楽浄土の寶味あり一そ捧しふ僧都奇異の思ひ仮し花翁ふ仏会ふ向ふ答て我佛在世ふあり唯摩居士の化現ふ師の法徳仮感しそふ本ふる恵心ふ拝して拝し奠ふ正真の如来仮拝せふ仮頼ふ翁則西北空ふ向て敬礼ふ仏ふ給ふして紫ふ乞ふ仮びんる楽と共ふ本主阿弥陀佛二十五菩薩空中ふ於れの御ありて花翁諸ふ西北ふ飛ちる僧都感信の餘り則其速の相仮目前ふ拝ふ当寺の本尊とーぬふ毒永の頃奈須與一宗高平家追討のふ出陣の時當院ふ詣で祈誓して曰今度戦場ふおゐて慶仮得くしめ当院ふ再建とふーと則佛前の幡ふ乞て弓ふ取て西海ふおり扇の的仮射て夕答ふ天下ふ落仮是年るの擁護あり一そ堂舎仮修造し願ふ成就の奇特仮世ふ知ーしめんーと即成就院とぞ号けふ

那須與一宗高石塔 堂のあふあり高さ六尺許ふして銘あり笠石ふ頃の因ふあり

軒端梅 塔婆のかーらふあり由未詳ふ


即成就院
那須與市宗高塔
本堂
笠石
那須與市の墓
御手洗
瓦師

大亀谷と藤の森より勧修寺坂迄之山林遥分小当る往道にて此所ふ茶店
あり。て容顔艶しき女あり名をお亀と称し自ら所の名を呼び大亀谷おひと
吉利倶八幡宮ハ勧修寺村の産土神之 此所の名ハ勧修寺村 当寺ハ小高き山之上ニ
あり。て本尊ハ延喜帝御等身の観世音之 長さ八寸 開基を紀俊僧正延喜
四年の建立にて本領ハ石大臣定方ゟ東大寺の末寺にて勧修寺
御門跡と称し氷室池 当寺の境中
大石屋舗 勧修寺より七町ゟり乾山科郷西の山岩屋明神ゟ馬場元ゟ北側荻の中ふあり
大石内蔵介良雄 浪士の家敵絶のなきゟに潜居し近年碑の館ふ建る
栗栖小野ハ勧修寺ゟり北ゟ山のかなたこの村ふ
候ニ
さ一枚のこるものとの荻の花ちん附みしりそふ句 文納言撰入
田村磨墓 栗栖野醍醐道のふ一林の中ふあり今ハ所を馬責ふと
大宅寺 勧修寺の北大宅村の南ふあり古ハ所ハ大織冠鎌足公の居館ゟり今ハ普洞宗
月峻和尚(宇治建て大宅寺と號をハ里を大宅ゟとりくゟゟの殿院大臣
冬嗣公の所孫高藏殿社のゟうふ小高き岩ふのぼしふのこりやの間をはらひふ

興福寺の旧池 興福寺橋ゟ岩屋の社鳥居れ巽ふあり
小野随心院を勧修寺の東ふ曼荼羅寺ふ号ハ真言宗ゟて開基を仁海
僧正ふ法験ゟい小野御門跡と称ハ摂家ゟ御連枝ゟ住職ゟ
二年六月大小旱ふ仁海正ふ勅ゟて神泉苑ふ壇ふ築て請雨経の法を修ゟ行ふ
事三日ふ夜其後九度詔ありて皆雨ふふくふ世人雨僧正と呼ふ永承元年五月十二日
寂年九十二 小町水 門内南の荻の中ふあり此所ハ当時小野ふ住ゟ良寛ふ宅地ふて
已上元亀ゟ禄書 女小野小町ハ此ふ住ゟ
栢の樹 園のおゝあり深ふ茂ふおゝ此地
深草少将の通ひ路 醍醐往還の西側荻の中ふあり墨染の南俊澤寺ハ此ゟり小町の宅へ
百夜の内ふ此ゟり行ハ一株もなしと云ふ
櫻塚 小野村の西ふあり小野小町ふ文塚ふも 四位ゟる百夜通ひ
説ハ後小野宮通の墓ともふ 野色山 道の西ふ 貞塚


下醍醐
五重塔
本堂
石戸石
小野の水
八幡
黒保
清滝社
白山
鏡御門

上醍醐（かみのだいご）



深雪山醍醐寺は小野南うら山上なる上醍醐と云ふ藤を下醍醐と號ふ
直言宗にて修驗道と云所なり當山の開基は聖寶尊師
理源大師と諡す延喜四年の建立なり醍醐朱雀村上の二代帝王の御願
法務の二寶院御門跡と称ふ摂家の御連枝當山を統轄し號する聖宝
尊師佛法相應の霊地なり得んが為一七箇日祈念をこらし五色の雲當山の
峯に聳ゆ則山号となりそれより獨の老翁來りて清泉を供養せし
醍醐味ありとて尊師かくまほしき古佛練行の洞諸天擁護の砌前
佛の遊處名神の所居之つれを足地主の神拔尾明神と永此地を守
ふ獻べし早く精舎を営て廣く佛法を弘通せんと擁護せんと
云終て見えず指のあとに三寶を唱へ尊師涙を流し山を上拜
延喜帝ほ感ありて除疫延命のある當山の諸堂を造営へり

本堂 某師如意輪を安置の回禄の兵火に焼亡秀吉公の御建立なり

開山堂 弘法大師理源大師の像を安置

五重塔 佛言説の曼荼羅を書彩色の四佛四菩薩の像を安置

上醍醐 灌頂堂 成賢のまうけ脇龍の梛不動堂 不動明王を祭る

五大堂 不動明王 聖宝の作四尊 脇侍

醍醐水 閼伽井 是也

如意輪堂 本尊 觀世音 脇侍

薬師堂 本尊薬師佛 脇侍 恵理僧都の作なり堂内に准胝觀音を安置

長尾天蒲宮 本堂の中央に一基あり醍醐郷中の産神なり

祖師堂 中央聖宝尊師 南に弘法大師 北に理源大師 各一尺の御影像

寂静谷 祖師堂の北にあり毎年七月廿日當山の千日堂内ふあり

遊宴 天正軍記 秀吉公花見

天正十年中興樂高うり此所へ移り

岩之上にて佳例三献盛物高名の衆

長尾天蒲宮 二基あり醍醐郷中の産神なり

灌頂堂 成賢のまうけ脇龍の梛不動堂 不動明王を祭る

上醍醐 灌頂堂 成賢のまうけ脇龍の梛不動堂 不動明王を祭る

五大堂 不動明王 聖宝の作四尊 脇侍

醍醐水 閼伽井 是也

如意輪堂 本尊 觀世音 脇侍

薬師堂 本尊薬師佛 脇侍 恵理僧都の作なり堂内に准胝觀音を安置

祖師堂 中央聖宝尊師 南に弘法大師 北に理源大師 各一尺の御影像

寂静谷 祖師堂の北にあり毎年七月廿日當山の千日堂内ふあり

岩之上にて佳例三献盛物高名の衆

天正十年中興樂高うり此所へ移り

長尾天蒲宮 二基あり醍醐郷中の産神なり

上醍醐 灌頂堂 成賢のまうけ脇龍の梛不動堂 不動明王を祭る

五大堂 不動明王 聖宝の作四尊 脇侍

醍醐水 閼伽井 是也

如意輪堂 本尊 觀世音 脇侍

薬師堂 本尊薬師佛 脇侍 恵理僧都の作なり堂内に准胝觀音を安置

祖師堂 中央聖宝尊師 南に弘法大師 北に理源大師 各一尺の御影像

寂静谷 祖師堂の北にあり毎年七月廿日當山の千日堂内ふあり

一言寺



醍醐天皇陵 三寶院の小人家むかふにあり 人皇六十代の醍醐天皇 宇多帝第一の皇子なり 三十
三年延長八年九月廿二日崩じ給ふ 壽筈四十六 延喜御門と稱す

朱雀天皇陵 冷泉院の内所 陵町にあり 醍醐帝の皇子にして 六十一代の主上なり
在位十六年 天暦六年八月十五日崩じ給ふ 聖壽三十 天慶御門と稱す

一言寺 眞言宗にして 醍醐末寺なり 本尊は千手觀音にして
安阿弥の作 内侍堂は當寺の本願阿波内侍の像 安置す
少納言信西の
直谷南禪院 醍醐山の巽にあり 賢聖僧正偃遍の地なり 本尊阿弥陀
佛の坐像にして 春日の作なり 側に地藏尊を安置す 信心なれば一夜の間に
多くの石塔を建立す 世人田螺の地藏と號す
笠取山 醍醐の巽の峠より民村多し 峠の麓近辺の圖場あり
岩間寺 山の麓にあり 三町ばかりのぼりて里あり
一本ざくらあり 名のみ名たのみしひもくはゑ神さびて
笠とるあらしの名こそやまめらん村雨そそぐ笠取の山 西行

頼基


日野の薬師
本堂

日野薬師 ゑ一言寺の南日野村あり法界寺と号し本尊薬師如来を金銅
九坐像と日天月天十二神二王等運慶の作にて左右に安置
霊験 稲荷弥陀堂あり 後壇に大日の弥陀の像を安置
定朝九作之初を日野左中弁資業卿の本願にて諸堂魏々たり記者
堂五大堂大門の蹟今田畑の字となりて當村の人家あり日野村と名ぐ
日野家別荘の旧趾あり 今土人内裏の芝と云
重衡卿 日野村家園の中にあり 三位中将重衡卿治承四年南都東大寺
の後重衡々々公鎌倉へ召くだされ本領佐局は日野のおいせ殿と申大まれ聖俊乗坊より
頼朝卿へ御一書を高野へ送り墓所を所望ありけそうろう法界寺
長明方丈石ハ日野村のうち五町許外山に脇ありて石床三間四面高
さ計一説ニ名石千人石と云 流を笠取炭山の往還より山越に
地勢れ険 方丈記ニくりくりをあつめ置を峰のかたちに巌の中より清泉涌出る
所あり 炎暑の節摂主の舌根潤せんがため弘法大師の感得ありと
東鑑ニ元暦二年六月廿四日 将軍右大臣実朝公
朝臣之輿此間下向奉謁将軍 法名 一云

方丈記ニ曰

住家ハ則浄名居士の室をけがさずとかやもくりくり
ところ〳〵に周梨槃特の行ふだにも及ばんをやいかに貧窮の報のくり〳〵悩すらん時ハ
いかゞくるしからぬ其時ハ念仏もせず観経もよまず
ただ我身をやすくしてつかれをいたはるべし
今仏前に有
東門蓮池外山の傍日
朝夕ながめ遠曙の二ツ也 余ハ
月ハ入山の端もとくりくりとおそく出てくるも哀

長明

石田社を醍醐の南ニあり石田社ニ氏家社中ニあり天照太神日吉ニ五社
ニ祭る山里の氏神ニ候 和歌ニ詠ニ

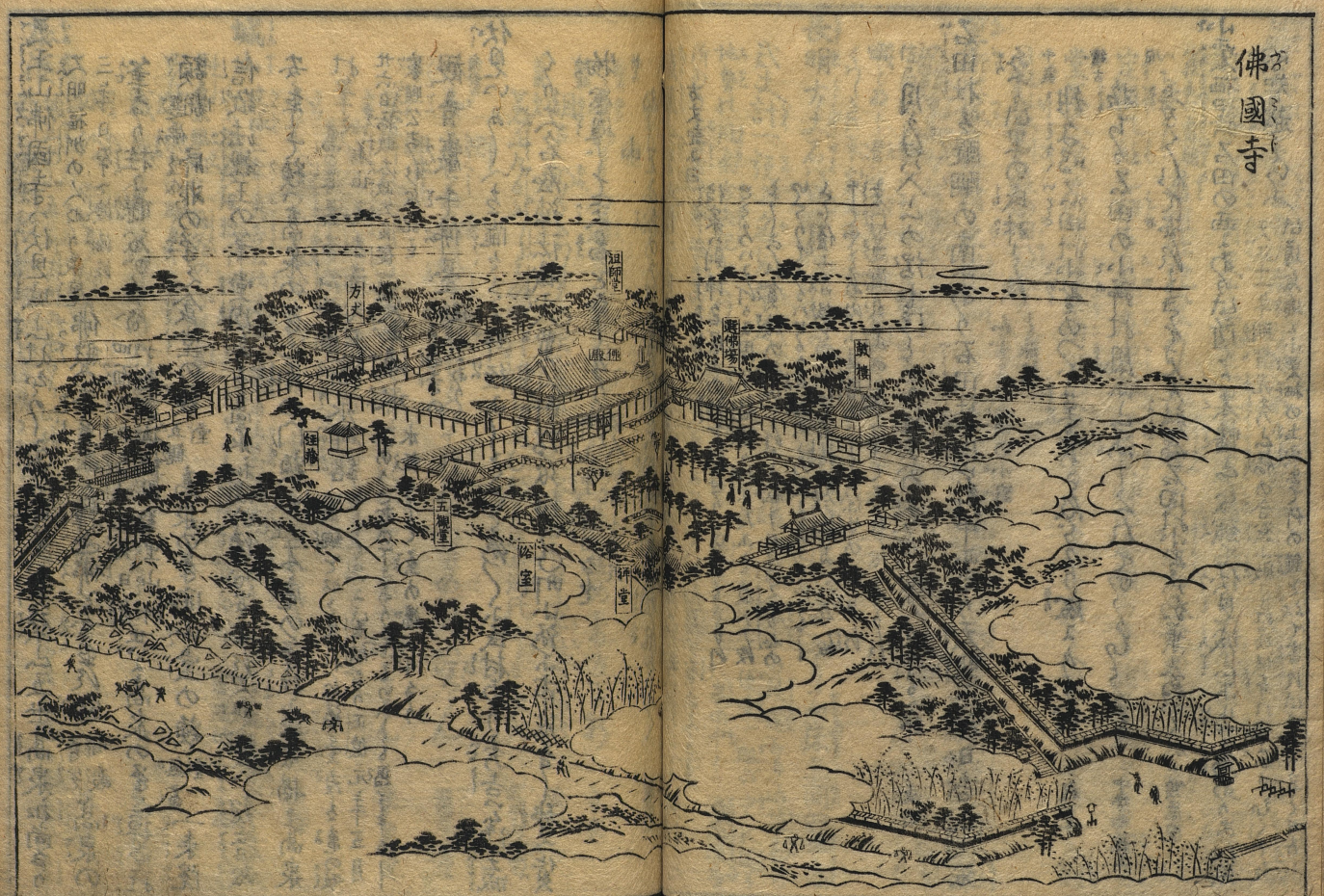
千載 雑ニ詠る石田社小萩のつゆ草あさぐもり涙こぼるゝ秋

続古 枯ちる石田の小萩れ風ニ露ハらくとしてやむるむくつけ

日 寄こゝろ安にもきそうん雑ニ石田社小萩ハ紅葉まさん 順徳院

小栗栖里ハ石田の西ニあり山所ニ本幡山ニ似て住民城山ニ出ると有古伝
明智越ニ云ふ 天正十一年明智光秀山崎の合戦ニ敗れ勢ニ江刃坂本へ越ニおゐむくつけ
山道ニ逃る小栗栖の土民出て竹の鑓を以て害ニ出ゐくるくせり

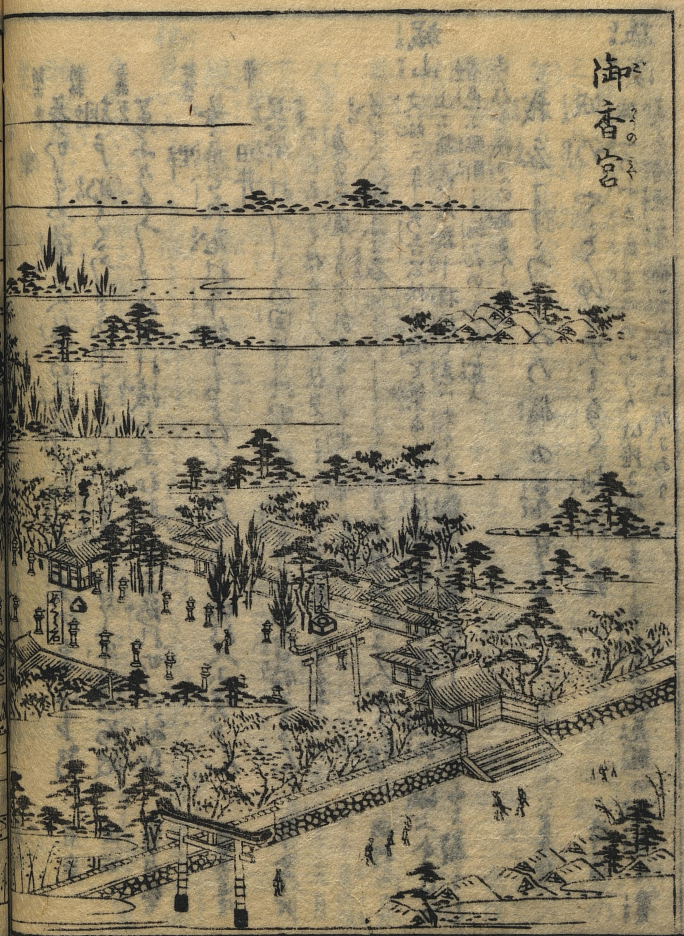
佛國寺

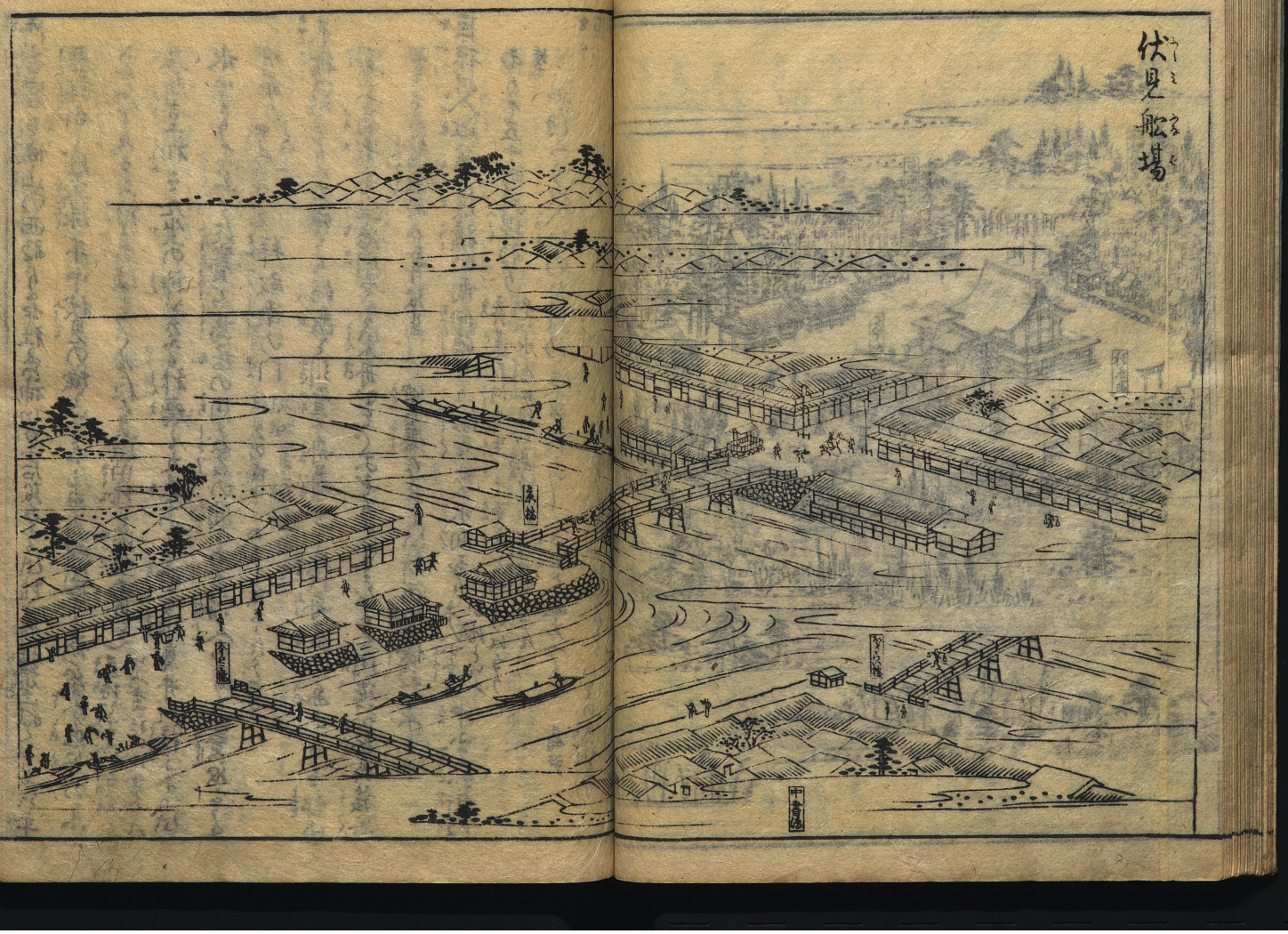


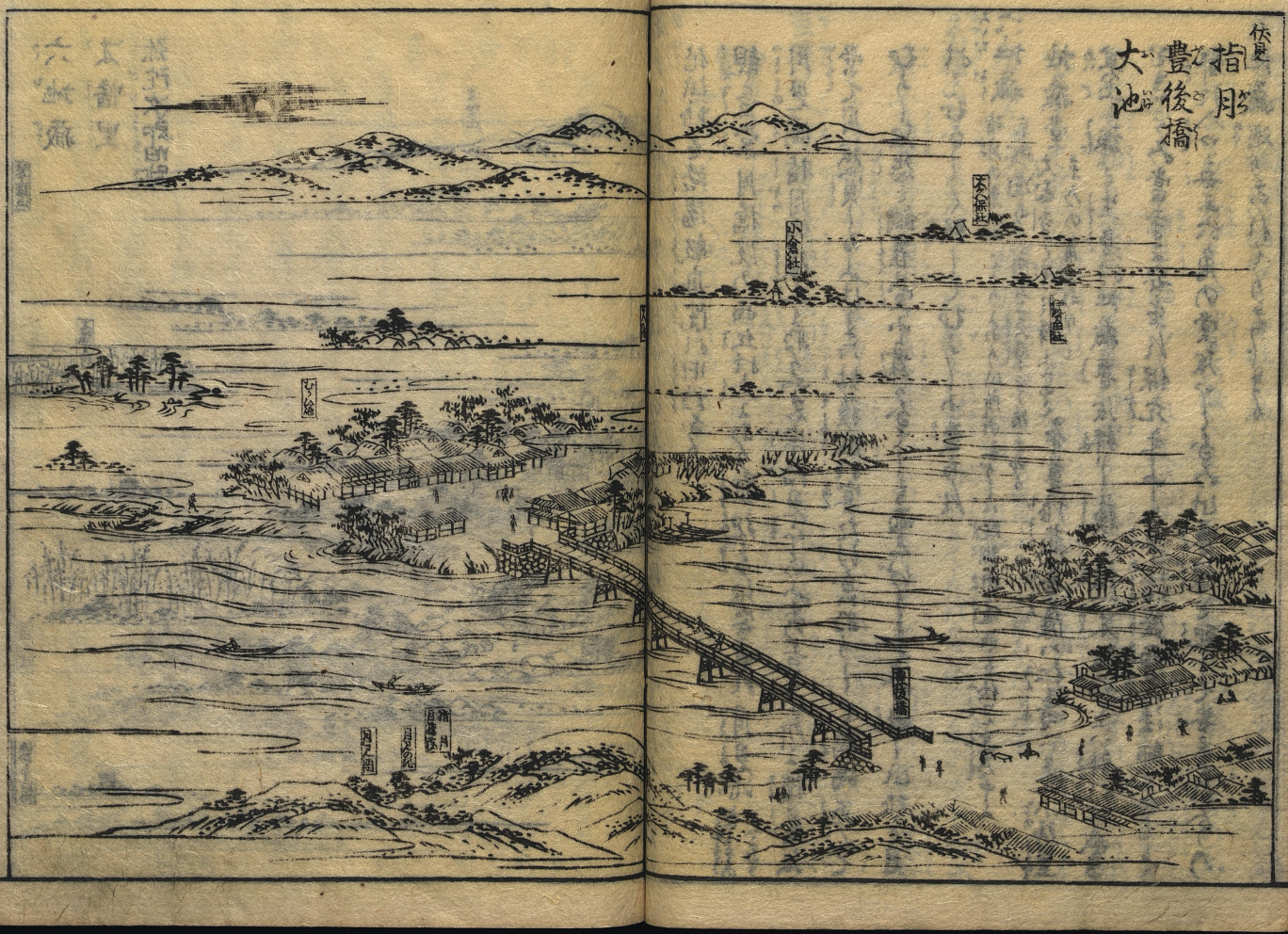
王山佛國寺ハ伏見城ニ在シヲ移シ開基ハ義堪五世高泉和尚ナリ
文明福州ノ人ナリ承應三年日本ヘ渡海ニ佛殿ノ本尊ハ釋迦佛ナリ左ノ額
筆ナリ柱ノ聯ハ四面ニ九天日月共ニ高泉ノ筆ナリ
額場 佛殿 昇非ノ筆ナリ食堂ノ額五觀堂 高泉ノ筆ナリ山堂ノ額無盡一乘院
信敬法親王ノ筆堂内ニアル高泉和尚ノ像ハ安藤重信ノ筆ナリ
安藤ハ額ハ高泉ノ筆ナリ南ノ門額天王本庵ノ筆ナリ柱ノ聯ハ揭ル高泉
ノ筆ナリ
四衆等鉾佛國 高泉碑銘 紫銅ヲ以テ亀ノ形ヲ鋳テ其上ニ碑ヲ建ル
鎌山ニアリ 天王 高泉碑銘 紫銅ヲ以テ亀ノ形ヲ鋳テ其上ニ碑ヲ建ル
廿六日 政太政大臣従一位金甬水 右ノ文ハ松ノ下ニアリ早シト云ヘトモ遅キナリ
家嚴公ヨリ仰記ヲ
觀音巖 千佛臺 共ニ南ノ
伏見ハ
籠々ニアル野徑ハ
名所ニ
名所ニ
名所ニ

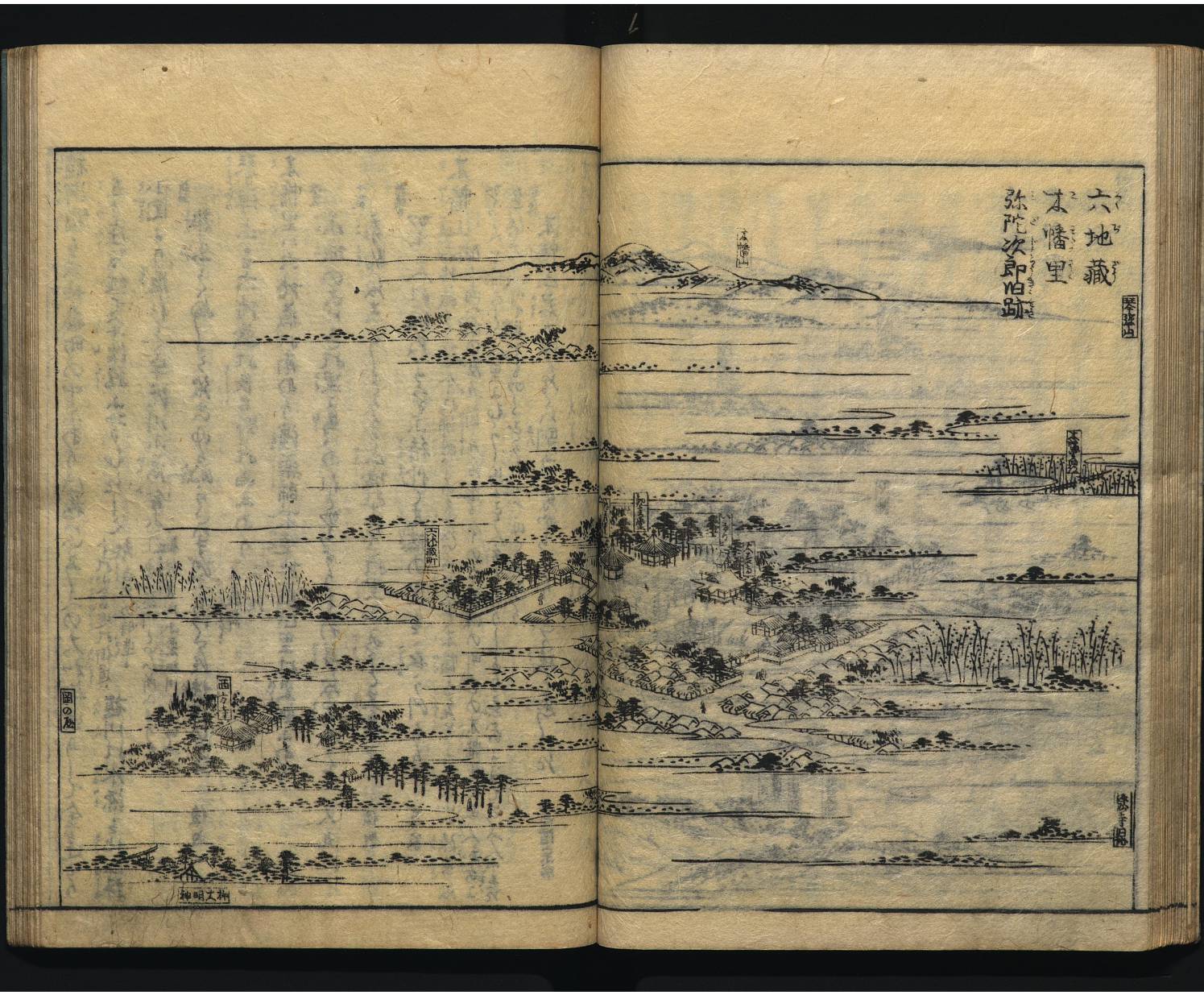


御香宮（ごこうのみや）




伏見舩場


指月
豊後橋
大池


六地藏
本陣里
弥陀次郎旧跡
琴坂山
天神馬場
天神馬場町
酒屋
園の森
神明天神

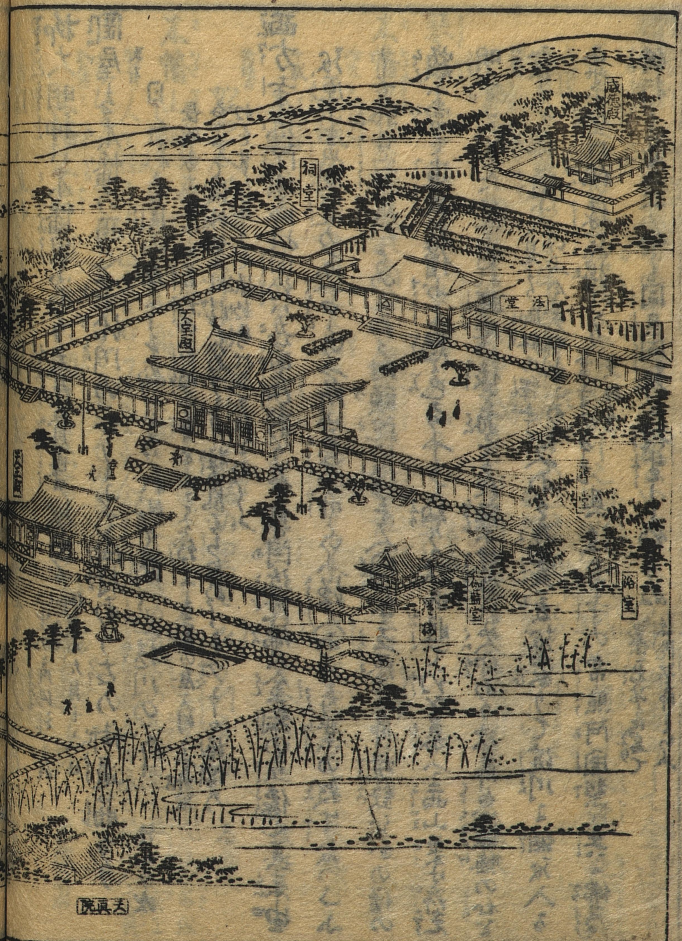
橋一可橋を六地藏町の中ふあり山越いあり〳〵の大和街道あり金ダ迄り
五ヶ庄於経て宇治橋ふ出りむれ〳〵と今れふ倉現れ街道ふ横川れ水源を北山林
小園より流れ〳〵宇治川ふ落合ふ
新勅撰 旅ゆく〳〵ふ行ふゆのぬうこまぶりうくふ横川のふ 後成
琴淳山を六地藏れ艮目野れ西ふあり 名義詳
木幡里ふ六地藏れ南ふり濱薬師木焼地藏山里れ東側ふあり
詠遺 山城のよりくれ里と馬ふあしくかちうを約君ふ会ふくて 人丸
千載 ふ駒ふ去そうとうるふ城ふいくれ里ふみてそ今ふよ 後拾
新後拾 かち人れ回ぬようをふ待佗て木幡の里をこ在りうり 右家
木幡山六地藏より北之今れ佛國寺の名ふくおして木幡ふ名号みて小い流茅ふ
限り南ふ園の在五箇所ふ限る今の六地藏の町古の木幡里之故人ふまふ
かち人と詠ふくい山里よもう馬ふと人多くありしより名ふよ詠てそくふ名在
多ひくくふ川て馬をもつ〳〵ふちうそゆくふありうり
新後拾 木幡山君ふゆふくい馬ふ〳〵ふかちうり多ふ旅ふ出つ 高階宗成

木幡周辺の地図

遠うくぬ代之れ里の渓ふ木幡ふ今ふ君ふそふ
柳大明神ふ木幡里ふあり天忍骨尊ふ祭る 例祭ふい九月十六日
圓屋ふ木幡の西之宇治川のふしみ氏村あり古の街道筋あり
日くれそ圓の在ふうそ柳ふうふしぬて流〳〵橋川のそ 詠人合次
長明方ふ記ふ曰若ふの白波小身をよそうふ船ふ
ふがえて満波ふ風ふ吹ふ楫ふ取ふ舟ふ
西方寺弥陀次郎ふ回ふ五箇在ふあり本尊阿弥陀佛ふ金銅の立像之真菜ふ
於原ふ当國淀の東一口ふ〳〵所ふ西方寺ふ〳〵ふあり秀業の教ふ於〳〵ふ
して邪見放逸れ〳〵のふある時頭陀の僧を人門ふ立悪次郎焼鉄於ふの僧の
額ふ当て追放ふ僧ふも怒色ふうして於ふる次郎性でそ暴〳〵西山栗ふ弥光
明寺ふ入てふ堂内ふ釋迦の像を拝ふ額ふ焼鉄ふ次印あり次郎ふ忽懺悔の心を
發して佛道ふ入是ふ御鉢の縁ふと
いい今光明寺ふあり みあ夜亜ふ於蒙りて淀川ふ網ふ入る
ふ紫金れ佛像於得ふり 当寺の本尊 其後当寺の常照阿闍梨ふ五ふ佛ふ
修行ふ遂ふ二人ふも同日同所ふ往生ふ給ぬ 紫ふふふ
陀次郎ふいう

黄檗山萬福寺





黄檗山萬福寺は五箇庄の南にあり開山隠元和尚を大明福州福清の人にして姓は林氏諱は隆琦字は隠元と称す本朝承應三年に東渡し萬治二年公命を蒙りて山城國宇治郡大和田の勝地を卜して寛文元年九月より伽藍を草創精舎成り經営多く異風を摸し名を黄檗と改む十二年四月二日後水尾上皇より大光普照國師の號を賜ふ

漢門 惣門 額 高泉 義の筆

宗經海道重脩 漢門の裏 聯 高泉の筆

聖主賢臣忠仰ぐ 山門の裏 聯 高泉の筆

山門二重屋根の間の額 隠元和尚の筆

黄檗山 旅濕

山門内柱 聯 隠元の筆

北斗南山秋日月 山川同芝聲

門開萬福人天集 龍象任登臨

祖庭無異天廣大 山門の軒 額 隠元の筆

門在顯揚日月華

大道没處權進步 直登兜率殿

法門名内外亂身投入旃檀林

福地鍾靈特感四王護國

天王殿 額 隠元の筆

東向 聯 千呆の筆

天王殿のうしろ 聯 千呆の筆

威徳殿 額 隠元の筆

大雄寶殿 額 隠元の筆

寶殿 額 隠元の筆

布袋和尚の像 金色

天王殿のうしろ 聯 千呆の筆

東向 聯 千呆の筆

大雄寶殿 釋迦佛の坐像 安置

法堂 額 隠元の筆

堂内の額 聯 即非の筆

法堂 左右 子 木魚

棒喝交馳國師千古猶生 堂内の額 聯 千呆の筆

象教圓統靈山一會儼然 千呆の筆

威徳殿 釋迦佛の坐像 安置

祖師堂 金色の像 安置

選佛場 額 隠元の筆

食堂 額 隠元の筆

食堂 聯 即非の筆

天開黄檗 辰巳日

北湧松園不老春

開山堂 額 隠元の筆

開山堂 聯 即非の筆

開山堂 聯 即非の筆

開山堂 聯 即非



二室戸寺

華嚴室 釋迦佛 大磯宝殿 節竿旗 多松圀 當社の
のあふ遥る 峯 妙高峰 靈鷲山の
五雲峰 妙高峰
の南うら

明星山二室戸寺を芙蓉の南大鳳寺のむしろあり本尊十一面観音
檀金の立像め長八寸弘分ゝ宇治山の東北溯れる屋より出現ん西向十番
光仁天皇の御本願ありて智證大師の開基ゝ中興隆明法師
宇治山をゝ二室戸山の南ゝ喜撰法師が所ゝ住のしるん

續拾遺 うちつけのむしろ屋の苔ゝ松風ゝ音ばかりする 法眼宗融

後撰 宇治山は紅葉をゝとゝ長月のもみぢをゝ誰をゝ
女 ちらぬる

喜撰嶽をゝ二室戸より一里ゝそのうら巽ゝあたりて檜川村のうゝあり
おりゝゝまわり後喜撰洞といふ絶頂ゝり喜撰法師をゝ祭るほこら
しるしをゝ阿ら井硯ゝ喜撰ゝ住家をゝ二室のおくゝ北余町ゝりゝ山中ゝ入て宇治山の
家はるゝれと堂の縁ゝとゝまりゝうのこらわゝ必ずそゝうぶゝとくりゝ古今
の序ゝ宇治山の住さんいとゝ寒ゝをゝみてゝとゝうゝびいぐ

都の巽宇治は其六
茶代名産なり
高貴へ調進茶毎
の例ありて製法他
境ふ取ことなし
山吹ちり卯の花
咲そろふ茶摘
とそ出里の乙女
の姿白たすきを
いさぎよく赤き前
ぞれを腰ふ纏
して茶園へ入り
葉ずゑのしく生る
をしごくうの風ひて
奥じくうのわりこ
陸羽の茶経みる

おかくれく
葉摘も
きくや
子規

宇治里　あづまの勅使　都より約程四里うして宇治橋のもとを宇治郡西をへ久世
郡くむの〻應神天皇廿五の歳王道稚郎子尊帝位をゆづりまつらんと
辭しまうされ国居しめし宇治宮に号し兄大鷦鷯皇子に譲りまつるを
父帝の勅なれば後に即位しまうさんと辭しめしまうす間
取り遁れ宇治宮にこもり兄の王子即位しめしまうし仁徳
天皇となりまします大和國飛鳥宮より近江の吐良宮にうつり幸
うらんと宇治里に一夜泊りまします庵なりし所を行宮と称
しまうさんと宇治都となづけ
新勅万葉集　もののふの八十宇治川の網代木にいさよふ波の
消えかてにして
古今集　さわらびの萌え出る春になりぬれば
後撰　おほ空は梅の匂ひにかすみつゝ
曇るとはなしに春ぞ暮れゆく
抑宇治の名産を永魚鱵鱧鮭一名宇治丸
圓扨茶磨風炉炭等取り
扨宇治川の流れ清く山高く風景
雅景
襲田主
石威
の絶妙なる事さながら画にうつしたるが如し
梅尾の開基上人獲麟異聞
の傳ふる所振ひよ裁置てまれと出石上茶〻を名にしけるまゝ宇治の
風土茶園よ可るうしてまゝに栽殖しめり
清悟石に二室戸より宇治橋まで五町あり　石面二方に彫刻
の像を彫　椎の木あり辻占彼方
の町ふ結坐し四面の紀音八九ふあり浮舟宮と宇治の小姫君と
所ふありて橋姫姿のうそ〻しい川の西うそれい源氏宇治十帖はこゝら
いふへより名廣くもまいかのあ絵に浮舟の君木玉ふうそくまで浮
うしろの木の下よ捨られあるいうんそくらせのして薫大将椎ぶれ空
しき庵ふうしろ中の君れいび抜れてふのおうしみまうさるしめる
も皆ふうれ名蹟ふそ物換り星うりそむのを暴れ仕
宇治川水源八琵琶湖うしてつゝん滔々とるれ石山瀬ふ経て山ふ
めぐり巌に觸れて宇治ふ着淀川ふ入　此間ふ鹿飛来り
そのほかのやそうちほのあれふ本ふいうふ数れり悉うしも



千載 朝湖宇治川雪絶くよ訪れこゝろせしあしろ木　定頼

新古 雪そゝり雲の懸ゝそゝ行くもあはれふるさと木ぬ　寂蓮

小倉殿にて融大臣の古き跡に別荘ありしを尋ね侍りて歌をあまた載せ侍りしに

後拾 花の色の移ろはぬ水さへ今の世も白くゝらの河長　定家

新古 ちりそめる歌冬の空うちまれ花さそふこゝろはなし　西園寺相国

橋小嶋崎を宇治橋にて下馬侍りしに

平家物語に曰平等院の長橋の小嶋の辺に武者二騎引ゝく出でたり一騎は梶原源太景季一騎は佐々木四郎高綱うゝ人目もはゞからず名乗りかけ〳〵渡しけり梶原は二段ばかりぞ進んだる佐々木如何せん梶原左右は西国一の大河ぞや駒も諸共に流されよと心得て鞭を解てぞ懸けたる

続古 浪白く小嶋の海もかすみけり八十うぢ人の網代ならん　光俊

秋の暮宇治にまかりてよめる

新古 秋の色も花もなきこそうかりけれ苫屋の波の夕暮の空　左上皇

源氏物語 無名抄の宮宇治におはしてほどなくおはすべき人の数にもあらぬ侍従の大将の御心ざしのほどを思ひ知りたまへるさまなどいとこまやかに聞こえたまふ

ものゝふの八十宇治川の網代木にいさよふ波の行くへしらずも　柿本人麿

女もとゞめぬ〳〵なのやうにいひてあるまのえ

橋のこゝろを

ものゝふの八十宇治川の網代木にいさよふ波の行くへしらずも　柿本人麿


木堂
開山堂
講司
鐘楼
東心院
宇治橋


観音堂
朝日山
宇治
興聖寺
恵心院
離宮
八幡
宇治橋



宇治橋を孝徳天皇の御宇大化二年始て興ず其後通昭和尚此橋を架けるに
橋は今の橋より西にあり明衡往来にも載たり
橋より流れ西に顧八宇治の長橋
三間水 と云は此橋の下を流る水也所々に流るゝ水也一説
みな伏流なり
通圓が茶屋橋のそばにあり
南に茶店あり通圓が像あり むかしより宇治橋掛替のしるし
橋寺と通称す
通昭和尚之を興し聖菩薩と崇む
離宮八幡宮と橋寺の南にあり神二座 上の社 応神天皇 仁徳天皇
下の社 兎道の尊を祭る 天平等院の鎮守 宇治郷の産土神
叔社を當社の北にあり離宮八幡社 離宮と号するは此地宇治天皇
當社の神は民約通平忠文を霊として祭る 此忠文は
仲平 貞平二年三月平将門征伐して名を揚 朝廷
やすく将門放逸せず 勅賞のことありしかども
ありしかば九條右大臣實頼公宮人のうち刑のうちに
忠文を
其沙汰あり

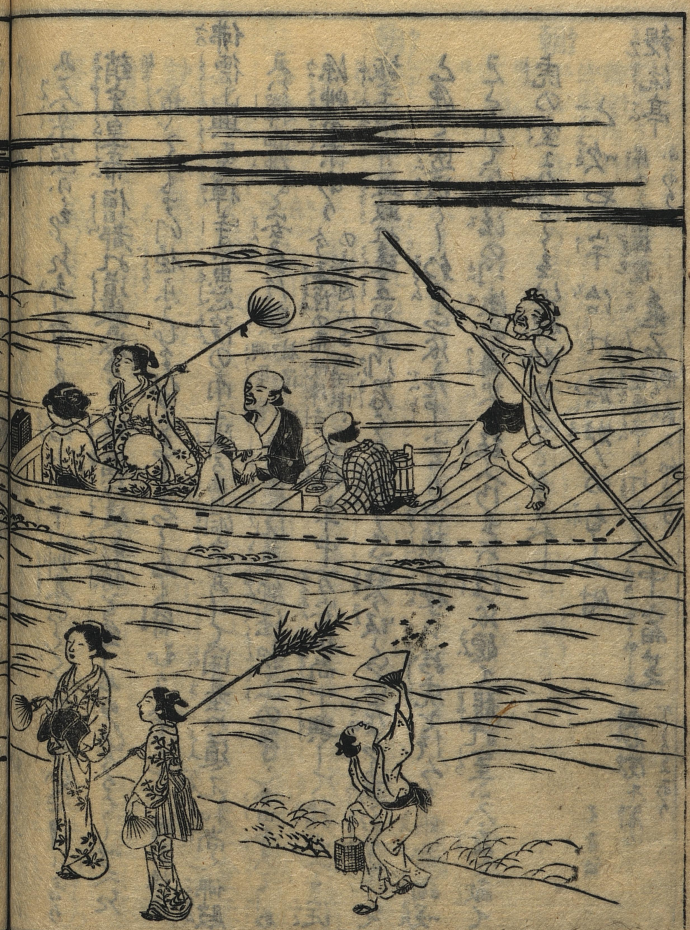
家集

鳥羽殿の
[illegible]

いさや
うれ
雲の
数へ
ちぢに
水江の
芦れ
みだれ
ちぢ

源三位頼政





槙嶋を宇治橋より乾八町ばかりあり　宇治橋より豊後橋まで九十町の堤あり　名所橋堤ともに間に槙嶋目川上流下流

筆の民村の上流より茶摘の舟つゞきて往来しげし

金葉　宇治川のはやきを見て

詠歌大概　この瀬れ夜そのみふねもとめかねつゝ

槙の島人　為道

槙姫やしま　宇治橋の西にあり　二社あり一社は水のうへ　今礎存せり

古今　さむしろに衣かたしきこよひもや我を待らむ宇治の橋姫　読人しらず

此谷の評説をとりてそのかみ神をまつる神中ねの住吉大明神槙姫の神かもしれ

泳ぎ人のうたふを清輔朝臣説ありしかの槙ありしかの神の姫と佐保姫姉妹

田姫をぐふは旧妻なれば槙姫ふさぐらんと糸滝肉のかたへ離宮の神夜毎に通ひ

暁毎さわびくるゝ宇治のさゝ波とよめるもかの玄恵法印の日むく

嵯峨天皇のかくれおはしましたるあるいは女貴人のやうなる夜半の時ふりくる

この涙よ袋をかけ忍鬼と化をとりて槙姫ならんと宗祇の説みなおとし

かくのごとくさまざまの儀ありかの源氏物語に槙姫ありこれ橋姫のこと

なりけりなどそさまくの儀ありしかれども真沙汰なし　定家卿も宜ひくるこの通

遥院殿の御説も清輔宗祇のに所詮は佐保姫龍田姫槙姫ともに女の通

ふうにて添た口授のあるうへ尤の通の師ふうそぬるもべ　新古

あら波本にさうく人恨のまふけなきふうにも槙姫　参圓

新古　槙姫れをる袖こゆるの紅葉いさうくしくられはや波　後宇多院

浮舟流る槙ふり玄町ふり川上の　弘安九年興聖菩薩格供養のふに高さ三丈六十二重

新拾　ひゞのゝ宇治のはしもとくらんあれ浮みもうくありやと　頼康

鵜飼頭ふ浮舟流ふり本町ふり南ふり

うひ舟をくふ民士のやをら宇治のゝくやこゝろを　参圓

槙尾山ふ槙ふり南みて北ふゆてるふ　土人丸山

新後撰　春きそもたなしのふらんなさぬ槙のとみれぬ朝ゐを　雅経

玉葉　あくうくゆ槙れおゝふ春こそ宇治の川長みよりく


平等院
本堂
西陽院
鳳凰堂
定家

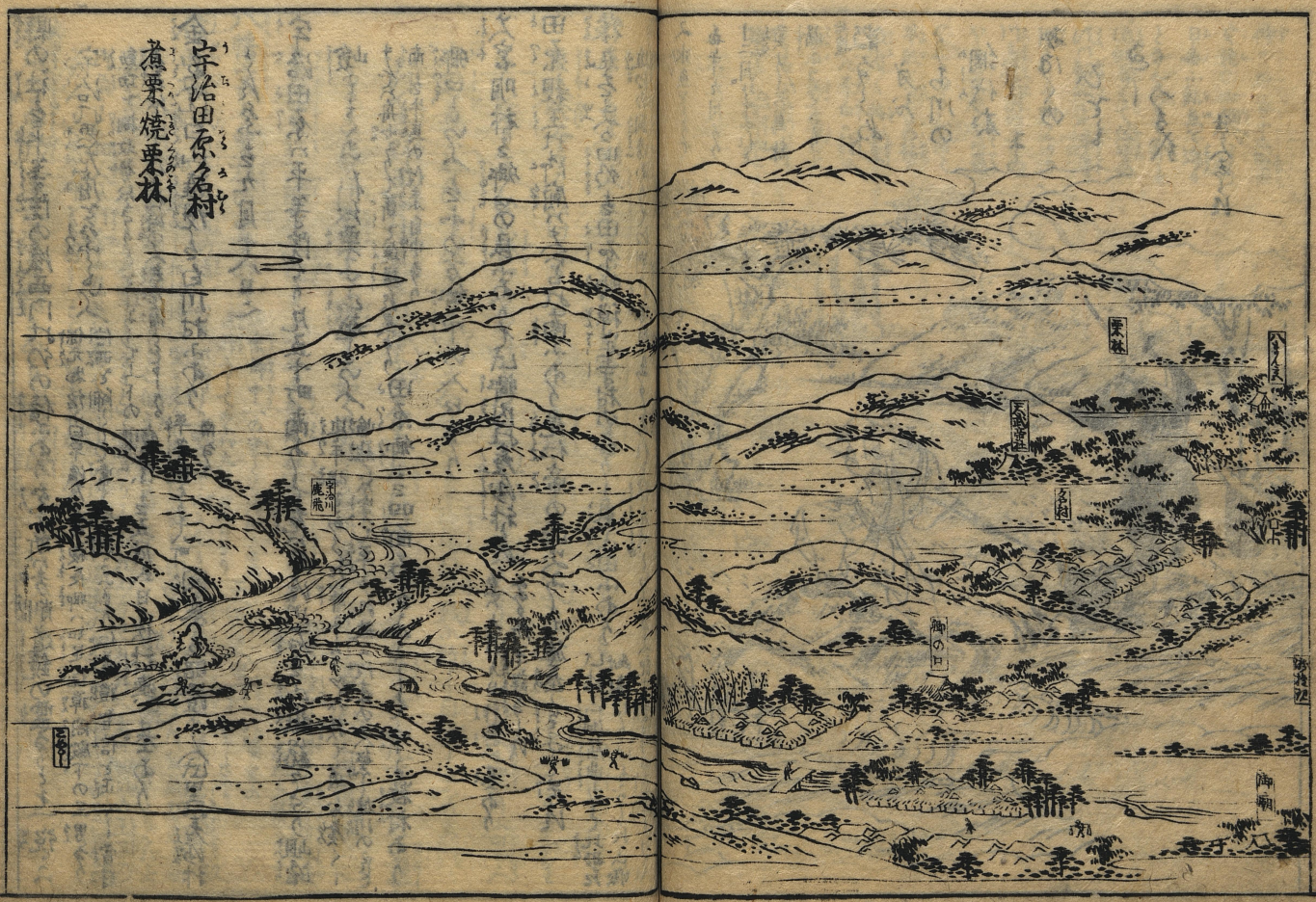
平等院を宇治橋の南にあり初は河原左大臣融公の別荘なりしを貞信陽成院
此地へ行宮故建られ宇治院と号しと承平御門も此院へ遊猟しぬるや
季部王記曰ふくろそれる六條左右雅信公の所領なりしが長徳四年十月
御堂関白此院を得て荘厳遊覧の地とせしより其後子息宇治関白頼通
公永承七年ふまあしと平等院と号し法華三昧を修せしむ河海抄の大意
佛殿は鳳凰の象り左右の高楼回廊を両翼の後背の廊尾と棟の上に
雌雄の鳳凰あり金銅を以て鳳凰堂と号す
本尊阿弥陀佛丈六の坐像にて定朝の作堂内の長押の上五十二体の菩薩の
像あり四壁并三方の唐戸は浮土九品の相を画絵師の長者高階隆章の筆
其色紙形あり其頼経の文を書く中納言俊房卿之を書く天蓋瓔珞等を七
寶を鏤古代の仏具にして美麗荘厳仏像なり鳳凰堂は永承年中
曽て回禄の災あり鈞命頼通公建立ありし鈞殿観音堂を最勝院と号し本尊十一面観音
南方の新仏なり
像あり此堂未だ焼亡せざる以前は宇治院の
[illegible]
[illegible]
[illegible]



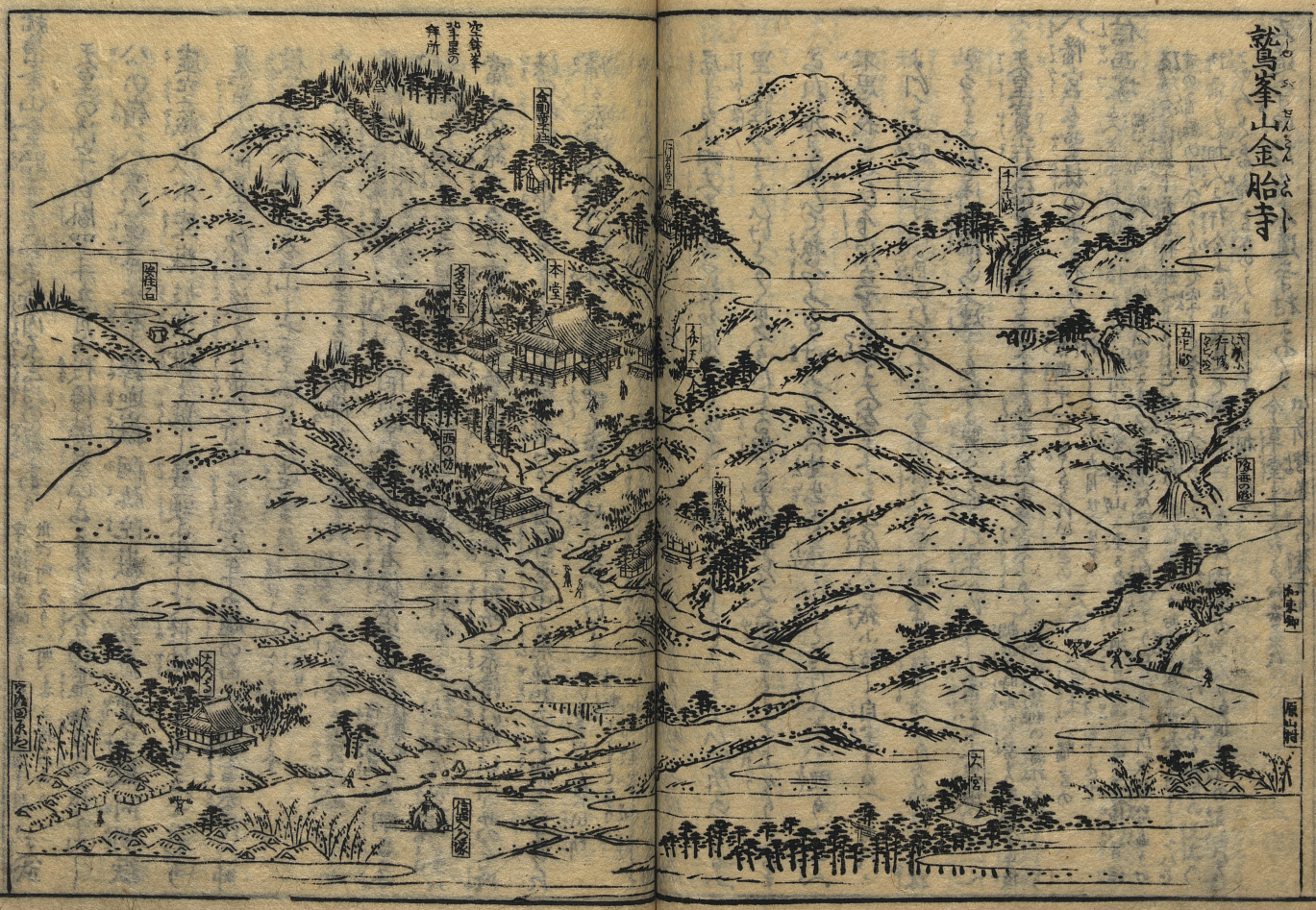
氷魚
毎年九月より
十二月までおしを
貢ふ 花鳥綵
情ふかき
拾遺
收るゝぬ
名所
うち川の
網代木
ねぢろの
ひとも
るし
つるゝ
俵人丸



侍中群要ふ城圀
宇治の御網代より
日毎小鮎魚を進ら
とうんひらく今を
此例るくて弥生の
比迄鮭波ら平等
院より十町こゝり
川上槙川のつゝの
やくうて人家
の屋うくゝ居く
早漕とやらお舩を
汲上く興こ新
しき李白の詩ふ
彩戸候と裏を
しろ此ふのこを
撰ぐらんをつゝ

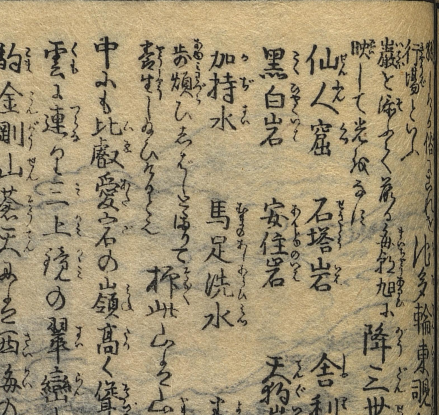

宇治田原名村
煮栗焼栗林
栗林
名村
御の口
御嶺

縣の社を平等院の後西門れの傍ふあり家の所ふ子削道鏡の悪ろうとを一説ふハ
宇治山に悪尤庵をふもつ人信西を師として常ふ学窓ふこゝり仁義禮智信を正くし貴賤
勲功を捌政務ふきうりくしてみて上下の仰ふを五月五日夜祈禱二基あり
金色院白山権現を白川村ふあり 平等院より十八町 南ろう 閑基を昭澄上人ふ里ふ建ふ
くん条を九月十八日之
宇治田原ハ平等院より凡五十町南ありて左ふ宇治川右を山嶽巍々ろう峒澗
巌しくまゐ仏栗子山越とハ 近年峒をあくた岸まろ々ふ移て道ふ作ふくし
まそふ舟ふうり薪を運送ふ是より田原郷ふ至る 南ふ牛馬の付来自由ふうり
郷口とハふをふの方郷中の入口ろう
大宮明神を郷口の艮ふあり式郷内ね建ふ 永久九月九日祈禱二基あり
多ふ所未詳ろう
田原親王社ハ廟ハ大宮社南ふあり光仁帝の御ふおして施基をふと号ふ
猿丸大夫の旧ゐを田原郷領定寺村のふり奥ふ山ふあり 比那ふ
幽棲ふりし山ふふつしたふ滝
辺ふの岡傍ふありて小川ふ流れ村ふくしたふ猿丸峠ふくし方大記ふ栗津のふてふくく
居ふの人ハ大友皇子ふ殺ふ仮猿ふ隠ふ者ふ人天皇ふてふくしとふふ山所ふろう
里人怪みふとひけろふ見ふくしたる機ふ栗ふ殺ふ又殺ふくして上ふり天皇
ふれ仮ふふして祝ふろふ山ふなれば牛生ふ成ふべくとて庁ふ殺ふ人ふ理ふり里人ハ
不思義ふとハ存仮立ふ遂ふ天皇子ふ山ふれ合戦ふ敗ふ自害ふのふりあふし
ふりて吉野王子位ふ即ふれ仮天武天皇ふ称ふ山栗橋次ふ築ふ所ふろう
とろろふしを御栗橋ふ焼ふろ如ふ奥ふろ如ふ栗ふ仁せして當ふ七不思議ふの首ふ一へ
天皇玉體ふ作ふ経ふ玉環ふろうて今ふ毎茶 禁裏 調進の時ハ必ふ献ふ官ふ多ふ埋ふ
里人怪みふとひけろふ見ふくしたる機ふ栗ふ殺ふ又殺ふくして上ふり天皇 を祝ふ禁制の高札を故ふ入ふあり
八幡宮ふ栗林の東ふあり 田原郷中一の宮ふ号ふれ仮ふの 天武天皇社 八幡宮の
信西塚 大道寺村通の信ふあり 此所ふ 峯山ふ至ふろふり 少相言信西ふ通ふ右傍ふ 信
落ふ処ふ一首を斬捨ふ一之傍ふ仮ふ仮ふ日信西ふ仮ふ仮ふ水ふ面ふ仮ふ仮ふ
ふの敵仮ふの人ふ仮ふ仮ふ空ふ仮ふふ仮ふふ仮ふ仮ふ仮



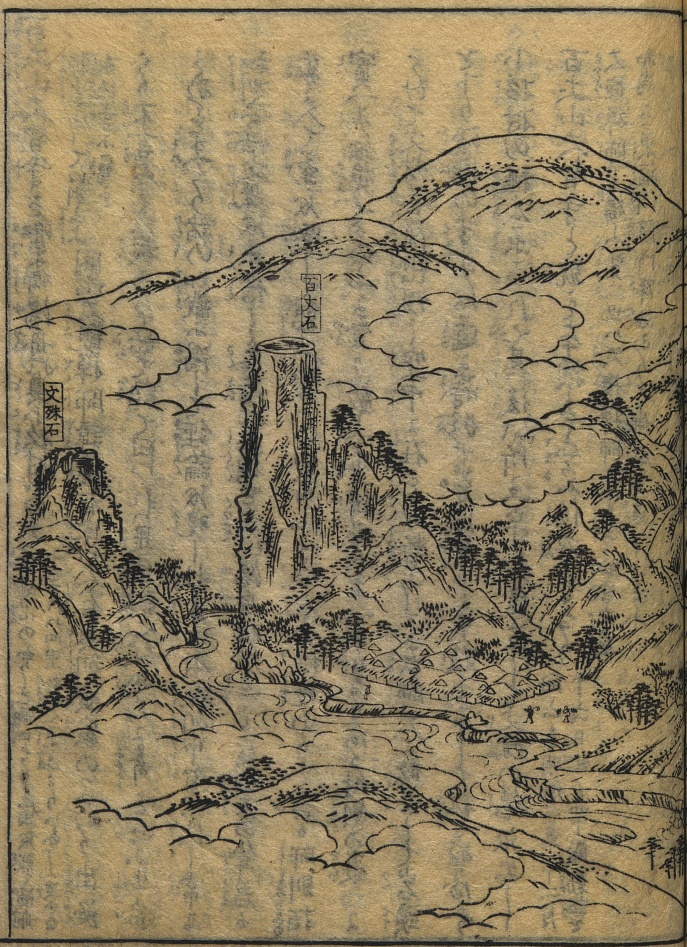
鷲峯山金胎寺

就鳥峯山金胎寺を和束郷内系山村の巓に有り　宇治田原郷より里程大凡十一町　舟六町より一町毎に標石あり　天武
天皇の御宇白鳳四年九月小役優婆塞山に草り天皇の恩勅を以て
八つの嶺八葉れ蓮華の表し釋迦嶽阿弥陀嶽弥勒嶽寶生嶽阿閦嶽
虚空藏嶽不空嶽妓樂嶽と號し巖頭に坐して修法すること五七日にして
是當山の開基と云ふ其後元正帝の御宇養老六年に越の白山の行者泰澄法師
役芳洲に慕ひて登山し七堂伽藍を造営し　後世之を七堂ヶ峯と云ふ今
案ずるに眞言にて本堂に弥勒佛を本尊とし　（他宗は釋迦を本尊とす）
事に依り行基の開山と成りて後年の時（開山堂は役行者像弘安年中の作）
社（當山の鎮守也）
當山の絶頂に寶筐印塔を建る是北斗星れ形所と泰澄法師此所に於て修
法の時石上に坐しるし虚空より鉢を投らるゝ鉢雲中に飛施の茶殻を今に
帰る泰澄入寂の後鉢なし此地に埋て空鉢峰と云ふ（世の人の多く此山所
當山東れ山脈を役行者泰澄の二師密法修行の靈嶽なり　（和州金峯山と準ず）



北多輪東覗行道石千手瀧一の瀧にて五光瀧二の瀧にて
巖と云ふ
降三世龍
仙人窟
石塔岩
舎利石
黒白岩
安住岩
天狗岩
加持水
馬足洗水
蓬生芝
（弘仁年九月後醍醐天皇笠置の
皇居の御供所にて飽のびなひく
ひく
中より比叡愛宕の山頂高く聳右左の方みる琵琶湖の漫々たる水面
雲と連なる二上境の翠巒を旭日鮮やかに千のくさをも悉く生
駒金剛山葛天ぬを西海の海原無庵の洲股淡路島見れ
あらしを摩耶六甲山の高根も見ゆ山頂より一眼の中に廻りて雙眸
の客となりぬ衆山と秀て巌頭嶮なくして樵夫も険岨一つの
老杉繁茂しくさを白日花埋んぐ閑し李白が天姥の吟も五嶽を走
し天台の四萬八千丈もさこそ相對とぐ

百丈山大智寺





百丈山大智寺は和束郷湯舟より奥小杉村にあり 鷲峰山のふもとより田原郷へ湯舟より至れり四里餘 ふもとより小杉まで一里半 開山大觀禅師諱は理有字は大有奥州金家の人なり出生 禅師 永保年中にて沿州守山 永保年中にて沿州守山

より不言ずして六載すぎて始て語で曰われ是良辨之父母大に喜ひ名を与ふ

と名をまうり諸の知識に渇して經論に暁し壮年の時近江甲賀に住し常に

和州安倍文殊に尊信し參詣して參籠を企し湯舟村に至りて抽木の翁君の

家に入て案に凭して憩ふ翁の曰當山は水の佳境ありと告る師則指

實に斗に推りてその山に登り巖上に坐禅すること一千日ありしが側の巖一つ

さけて文殊菩薩出現し空中に在てその暫くして去師大に歓喜して岩頭

をとり殘排のまま形に通ずる時ばかりて黄形半ばかりなる今

小杉村の極本系これ其法式所立草庵建立して文殊の像を安し

百丈山大智寺と號をす額をふ 開山を明徳二年十二月

大觀禅師と編入す二世は大機禅師之中興 如雪文叡

和尚之を編入す佛殿再建 佛殿の本尊禅師の佛をふ阿弥の他の方々の文殊の像を安し後水尾院の勅願寺と

坐禅石 形ち僧侶の坐禅する如し十四畳敷ほどの平石にて禅師の坐所なり

文殊岩 岩面勝りのれて文殊大師 布引石 形大龍之 仰ぐ如くあり

久世鷺坂 宇治田原の西之山所をいふ 大和街道より久世村之

慶安の新田の南にあり

白石ふく坂 山の松ふくふくとゆるく坂也

家集 人麿

今日そみる白石坂山の白ゆふしでに佐保姫深し

推尾山光明寺 長七丁餘 源二位頼政

山すそに觀音堂と祖師堂あり 祖師堂は改て新に建 寺号十一面観世音 約基大士の作

道のかたらにあり其所 推尾山と云

由緒 社は観音堂の南にして東の山本にありある所 高倉宮 宇治 合戦之

敗北の時 この嶺に登りて家に納し所を崇あり 改て井殿 放遣り

此所の風俗井に九月三日祭り 所々祭礼 街々の驛にて人多く 参詣の人

玉水里は長沈の南一里余あり 所々の道ふたつ 井 従里 通り

玉水井は里の小道に清水あり 橋弦 その邊に玉水の井と井堰の里玉水の

水は井は里の名よりて湧出る準へつるとぞ

山吹を咲そへて娃を水の底

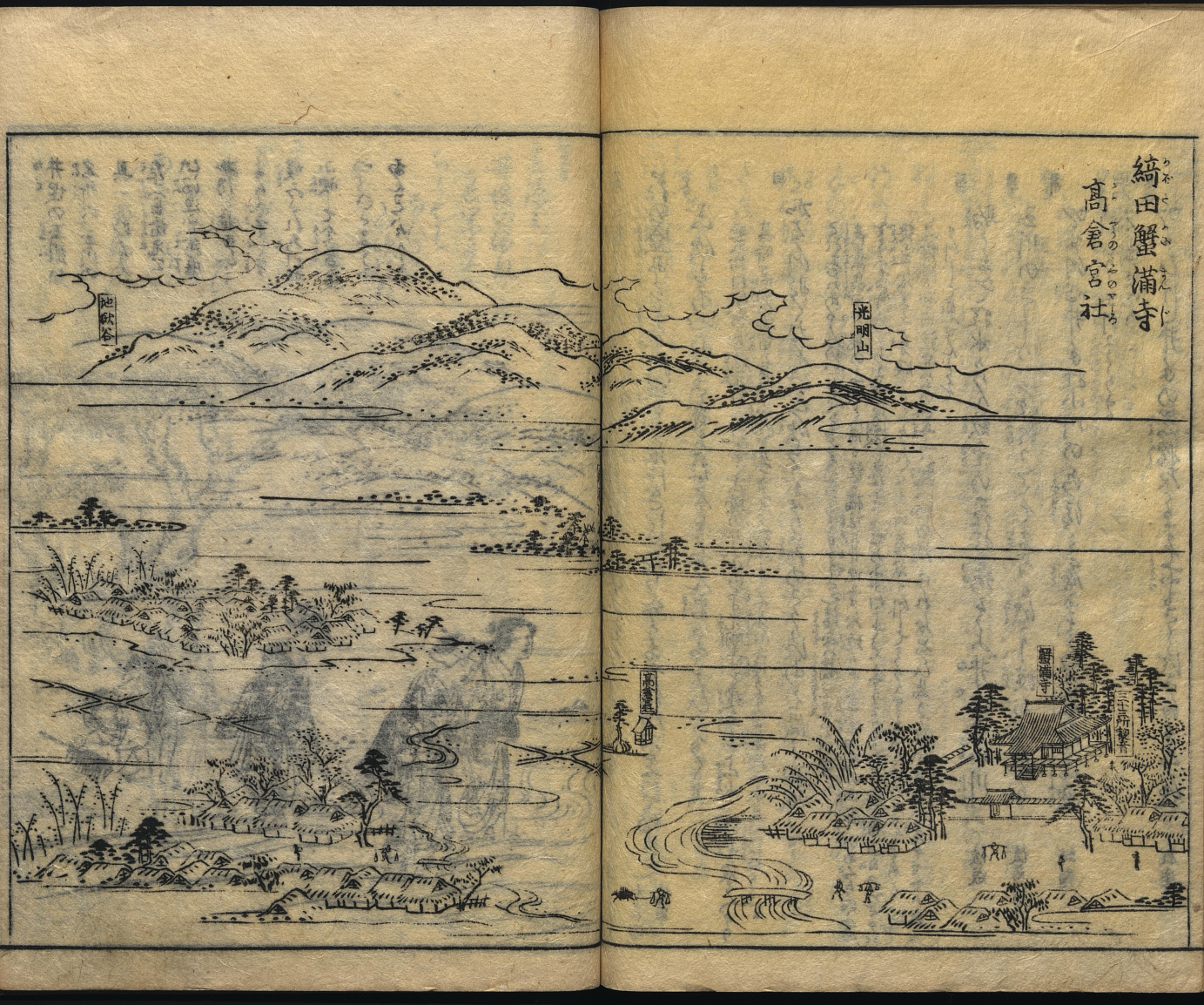
鬼貫



玉水
井堤左大臣旧跡
玉井寺



玉井寺を井堤里と中水を村ありと家旨に真言律して本尊聖観音安置
伽基を舊貞観阿闍梨の建立在中に玉井娃塚あり
伊勢物語 むかし男ありけるとかやうたわれる人の
山城のおくのふかくも見し人のこころもなれば世ぞうき
勅撰今 延喜十三年亭子院の合歓
宮戻れふるさとの花をみよ井手のうぐひす今やなくらん 興風
井堤里を玉水村の名所の内にて井堤左大臣橘諸兄公の別荘を山里の南に石垣
村ふてありし所の内の上村の山ぎわにあり岩ね松中落ちもりの泉みえ
ぬみして今八田の宇ふりぬ昔の藤なりて真孤苗今山地にあり井
なの垣をそへん限りそと思ふ心悪きうみえ形いて大きにもあらぬ
名れ垣のやうに踊りありくさもゆゆしく常に水ぬるく侵そ夜るなどにぬれ
さらいみじうふも清て物哀なる事ぞそうんなりける 无名抄
意取
後櫻 かくれぬるかぬにもしめる秋なれば井手とばやまるほし 恵房
玉川（名井堤川ともいふ水上八井堤里より東二里ばかり加茂より流れて井手を
六玉川の其二うり 経て水里三水西へうづんで流入たる所を玉川の下瀬といふ
ふく植さぜりしうるの花のかげにかくれて住む蛙の声に井手の玉川
山吹のかくれて咲ける井手の玉川 俊成
雑
玉川のさとの山吹咲にけり花の散らん岸の波立 俊頼
岩橋 玉川 岩橋 師頼
家集
かくれにし井手の岩橋かけてだにあさけの山吹 教季


綺田蟹滿寺
高倉宮社
光明山
地獄谷
萬倉宮社
蟹滿寺



井堤の玉川ハ
名所にうき玉川の
真一ツめぐり
たゞ長堤諸兄を
山の辺ふ茶屋藤
やなぎ柏のもと
よろ八重
咲つゝじ面
ふ映し七重盃を
つゝじさかふ
あんさんかな



拾玉集

玉源を
井堤のゐの風
名にあふそ
うらそよ
うらふく
山吹の花

義鎮

玉葉

いくたのへ
井手のうへ
かはづ
あふせ川を
玉ゐのゐ

俊成

高倉宮垂廟を玉水村南鳥居村のほとりあり後白川院養二の皇子茂仁親王と治二条高倉

小御殿おもの高倉宮と称す 平家物語曰宮は南都へや落させ給ふらんとて俱甲冑三百騎鞭

を揚て光明山の鳥居れ前を通つるとも雨のふり降うに射をりかれ何と射をるとも矢一筋も宮のたの御側後ろをもかれ御身より前へ出すなと仰ありければ

光明山寺旧刹 多居村の南綿田の北嶽谷 綿田の小丘

普門山蟹満寺 綿田村にあり真言宗にて本尊釋迦仏 紫銅の坐像 當寺傳

記曰むかし山卿人常に至誠にして佛法に帰する事あり女人をのろひ幼より

普門品を誦して怠ることなく一日田面に遊びしが村人蟹をとりて殺さんとするを

買とりて放ちやりぬ其夜夢に蟹の来りて告ていはく我は是汝が放ちたまひし蟹なり

我いまだ嫁をえず願くは汝を嫁とせんといふ女

也心ぬ教をうけて吾けふ墓を吐出せし中へ這入ぬ家に帰りて悔しくも

甲斐なし其夜初更の頃石の上の人あり今朝の約束をわすれしかと

いふ 漸問ねどひてのちつぐなふべきよしをいひて消ぬ 則

帰りねむりぬ夜明て二の室をうしなひ門に普門品を誦して居たりしかの女這入

三日ありて男子を産ぬ其子の眼ひかり女の腹にありし室を這出りて属を以て其戸を

とぢたり父母是を大に悦ぶ子ども百千の蟹群来りて地を散ぶ獲斬

て蟹をもちゐ客に饗ふ客閉ば夜普門品を誦て終ふ時に長ぢかりける

教有現ぬ 海神なり常に擁護せり 寛文年中の頃迄も亀ありしが

其穴地を埋て其上に堂を営み真福寺蟹満寺と號く 一名紙幡寺

梶原社 綿田村にあり所祝ふ平二景時霊あり一説ふ延喜式の

綴喜郡の社是なりともいふ本健伊那大比賣神社ともいふ九月三日

涌の社 社叢森々として涌出社あり所祝伊弉冉尊の夫天貴神なり一説に一夜に涌出ると

北吉野神三重 金剛蔵王 綺田の北にあり山伊勢上野の御遷座なり真言宗にて神童寺と號く

本尊不動 鎮土権現 立像長八尺なり當山傳記曰金精明神童子と現じ役行者と

共に仏の尊像を開山堂に役行者の像を安置 四十二年の御開帳ありと云

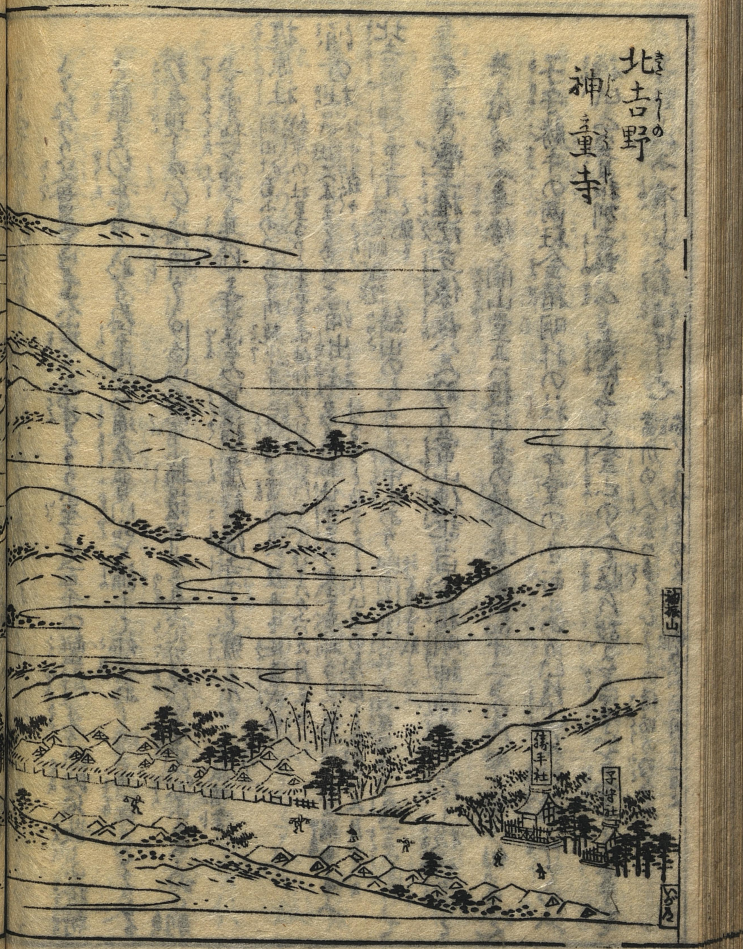
子守勝手の両社金精明神の社は本堂の北三町ばかりにあり

祢山 普賢菩薩 釈迦 吉野山に准して知べし 當所の人家は多くむかしの俤ありと

吉野山に准して知べし 古歌なり

北吉野 神童寺






新渕恩菴
天神森
天神宮
六坊
六坊
六坊
天神宮
武田社
方丈
佛殿
昭堂
八幡宮
佐田里社
奥社
六ヶ作谷

妙勝禅寺 本津川より西新村にあり 酬恩庵 禅宗にして円基山と号す 応仁年中一休和尚康正の比再興と伝ふ殿内に釋迦佛を安置す開山堂に一休和尚の木像を安置す 方丈の庭に佐川田喜六が好む所の名石あり 南備山 水晶石あり

神 南備山 薪村の西にあり峯に天神社 薪村の南にあり 天神社の西にあり 天神社の隣にあり 天神社の異にあり 何れも菅丞相を祭る

綴喜郡 普賢寺溪の異名あり 方二町ばかりにして南ふかくひらけ縦横に大石多し 皇居より遠さ十一里

普賢寺溪 天神の森より南ふかくひらけ縦横に大石多し 皇居より遠さ十一里

長月のはつかあまりの秋をまつしらめもうとをとる露

後鳥羽院

行家

牛頭天王社 普賢寺谷の山上にあり 此里の若王子

段々良不動堂 都谷の山上にあり 弘法大師の作と 大御堂 寺号は普賢寺 下猶あり 本尊阿弥陀佛 春日明神 従位長教

やのそまつくりの里ふるき名をくもゐ白菊の花

為世

藏圀山 若王子の西にあり 祇園 逆臣長慶を祭る一面紀ある谷なり

本津川 一名泉川 河源は相楽郡の東より流れ来る 木津川 本津川と泉川と合流して木津川となる 木津川と泉川と合流して伊賀山田郡阿知と云ふ所より出伊賀半ばの水と川流れ来る 雨ふれば晴天の日も東風つよく吹く 水上より白山堂の面を向布施屋あり

月影も名のよりつる泉河川風流しのもろ治

後宇多院

泉河をわたりくらの馬上にて唱子規

後宇多院

ひさしくて水をもしつくりくる夜半ありけんのもち

後宇多院

本津川渡口 京師より大和街道なり 橋あり 天平十二年 行基菩薩泉川に橋なくて往来なやめるを 本津里 聖武帝の御宇 菊都大佛殿建立の時 材木を運送して本津の名あり 此所より泉川に沿ふて東へ一里半ばかり 木津の名

ゑちうくぶふそしおふ城の泉の里ふるき川風あり

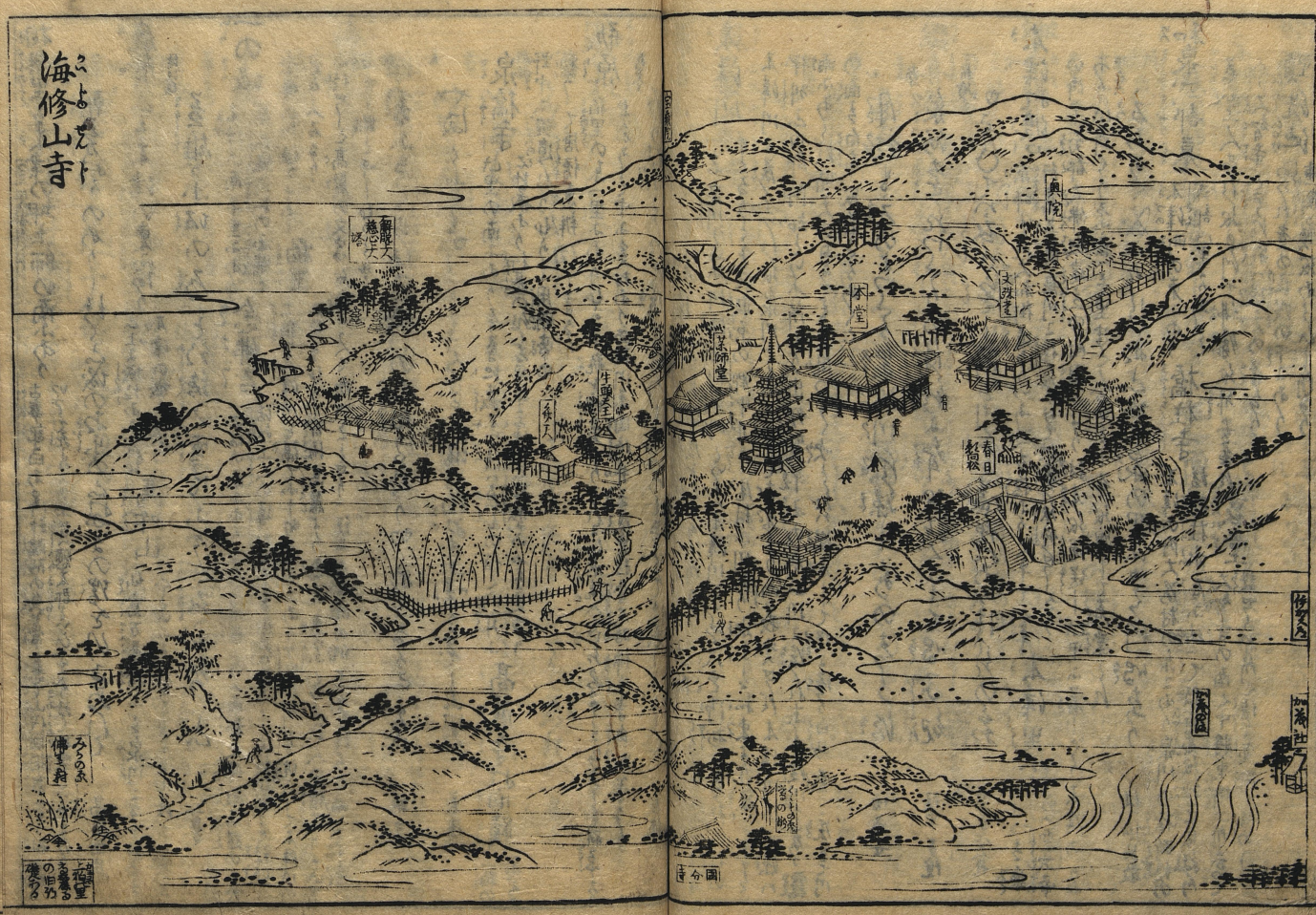
従位長教

和泉式部墓 本津町の東にあり 橋柱寺 本津の内大路村のほとりにあり 泉川の橋断絶の後橋柱水屋ばかりにて数百年を経たる松あり

哀堂 智恩寺の南の中将重保卿の所にて謀せられ所にて傷て重衡の墓の艮隅の下にあり

頸洗池 ゆかれ 重衡の墓の艮隅の下にあり

海修山寺



相楽里 本津の坤土師の南にあり 古事記曰ある仲哀天皇の時に當て悪賊山代國相楽に至り樹のもとあり 人ありて光あり 其人云我は天神の子なり今吾に逢ふ者必ず死ぬ 汝は誰ぞと問ふに答へて曰く我は是 高皇産霊尊の子 天津彦根命の子 味耜高彦根命なり 今吾を祭れば汝國を治むべしと云ふ 即ち其の神を祭りて相楽と号く

朝方 おかのめうしほく 坂のおかのふもとの塚をいふめれど 高橋朝臣

鹿背山 本津の東にあり 山上に城ありといふ 仙覚万葉抄に泉川のこなたに見ゆる山なり 馬咋山 本津の城とぞ ふしいくりかくこころぐし

笹雄ら小坂のふもとを行きて雪降るらん 公暁

一の坂 本津の南半里にあり 一の坂の南にあり 土人土清座ら南都の仏殿再建のとき是に城大和の名所と 念仏石 法然上人の導師にて堂供養ありしとき念仏の功徳をあらはし 狛里 上狛の本津川を隔てゝ本狛の西にあり 高麗より恵猿恵常といふ人の僧ありし里 狛人と呼しもこゝなり

拾 ふきくらはの坂の瓜作りのかりそめ 朝光

やはくもの 奥慶

泉橋寺 狛里の南にあり 本尊地蔵菩薩 上狛の野中にあり 行基の建る平記に古津の云々 周明帝の勅して唐僧恵雅住しまるり

狛原 狛里の東一里ばかりなり 秋を惜むらん水鏡 秋を惜むらん 新古

みのれるころ 信

そよ草 いつのまにそよ草のしげりぬらん 源川光俊

いつのまに 善

はつのわせ 定家

岡分寺 は卿河系村にあり 今は阿弥陀仏と聖武帝の御像にて 茅切石 野草をかりしとき 国基云々 日本国西山寺と建てまるり寺と号く 仮屋町あり 又 昔は堂塔ありしとぞ

海住山寺 祝系郷 仏生寺村の山にあり 当寺は聖武 御願所にて中興を解脱上人 又 解脱の上足貞慶上人 宗旨真言にて本尊を十一面観音脇士地蔵弥勒 三重塔 招提寺の開祖鑑真和尚漢土より将来 聖武帝 仏舎利 仏牙を安置 文殊堂 本尊を文殊菩薩 役行者の縁を安置 新向松 解脱上人の植置 奥院 本尊十一面観音 解脱上人の作 左右に解脱上人の像 安置 南の堂に月明の窓あり 解脱上人の禅室 解脱上人塔 慈心上人塔 西にあり

井々守 慈心上人 耕作のとき井を守れと夢に告給ひしとぞ 井手 里に杜持ち云々あり 常に水筋を守れと号く


笠置寺
鹿路山
獅子吼
北笠置
観音台
伊賀路
天佑寺


鹿路山
解脱上人墓
千手の滝
獅子吼
本堂
脇門
天佑寺

恭仁の都は旧地は恭原の西鹿背山のかうもり 聖武帝の第二女天平十二年十一月 橘諸兄公山背国へ遷都ある事 始て宮城を造り帝行幸ありし時の歌也 賀世山の西の通り也 左京一条一坊を右京一条一坊に遷る 続日本紀に委し

新勅 ふるのらうこ久迹の都をおもふらし春くのやまべのさくらを 藤原清

新拾 吹風をむかしをしのぶ人もあらしふれ郷とはるゝらん 土御門院

泉のいつらくみをも絶てくふの郷ならねとめるん 兼氏

流園を恭原の西かたの渡れりくり 南都大仏殿建立の為伊賀より材木を組て泉川を流す 岩石は中おのつて通りしと 聖武帝崇仏の心篤く故に諸国の名山の岩石を砕て運ぶ 故に此所に良弁僧都岩根のりそ千手のいし仏像一尺余 真くろにして堅き石 此所を流の国くりこの岩 泉川下流今飯岡と云

加茂のやしろ恭原より略北の方の道の傍ふあり 加茂郷と云名ありて中ふねあり

鴨川 泉川の別名なり 賀茂川原 鴨の渡み玉川泉坂いふ

布当山 恭原の西より一陽山 泉川のかなた 隔

ゆくくも山もあるものと見れを百代ふもあるへき波大宮所 後人作

旧 古郷を遠くもあるかな人ふるく我もふるく栄せし 高岡にの内連

鹿路山笠置寺ハ本津川の上笠置の山上ふあり 龍ノ武家多し川坂福と両村あり 南笠置北笠置とへつ

五月雨のよすからのつくりもされもをそうくしけく 後嵯

当山ふ笠置と號るハ往昔天武天皇此山ふ旅猟しめ給ひし駮馬巌ふ勝坂屈して動ぬ天皇尼念ひして三寶ふ祈禱し安泰ふ給ふ

ものゝふの此山ふ佛閣坂造営とへと祈誓しめ既ふ感應ありて忽馬速り進む故ふ其證として着御の蘭笠なをくして還幸しめ給ふ佛閣坂建立ありて笠置寺と號しめひぬ 藤原坂ハ四町あり

本堂ふ弥勒佛坂本尊と次 自然石ふ 護大堂 宗旨ハ真言にして新義之 さて坂正月堂と号ひくへ春三面月の間天下安全の修法ありて二月堂三月堂あり当山西嶽の後ハ南都東大寺

弥勒石 天武帝ハ仏坂ふくへひし時ハ天降りて弥勒の像坂刻む 高さ二間横四間くり周囲の岡石面焦て像ハ彫ふくへ

薬師石 高サ十間余 遺る余 文殊石 遺間くり 虚空蔵石 高サ八間くり石面ふ 仏像解くり

千手崖 良弁僧都まん坂ふて彫坂 胎内 桃 奥の院させるくり 勇坂縦く

楠書判石 捕正陽石面ふ書判坂 護摩壇跡 良弁坂所おゐて 呉吹岩 祈禱ありしと 居なきしくり

護広絵法の母型のまま坂本神當山の鐘樓解脱上人眞土より鑄浚撰金弘安
十一年銘ニ曰笠置山般若臺建久七年丙辰八月十五日般若臺一上人と云日明神と
大和尚南無阿弥陀佛
鞍面の解脱上人塔八町ばかり東の溪坂陽にて千手瀧石正童子瀧金剛
所あり向ふのかた
童子瀧山のふもとにあり後醍醐帝の皇居を當山の嶺にして元弘二の九
溪川のうれたり
の約束所石ぶ勒石の上の平なる楠正成もまうで来て始て御味方をつく陶山
小田ふも夜討せ所と山ふの背みて小の方にあくたり数百丈の巌石そびえそ
鳥も翔りくく古松枝を蚩蓉苔蒸るくく麓ゆく泉川を帯て白浪巌を碎
く勢ありて水流の委曲驚蛇小徑のごとし山刕第一の勝地にして千巌秀を競ひ萬
壑流れ争ふさま水の美をひつくせ
栗栖天神宮笠置山の麓人家の西にあり所の天満天神と見えて笠置寺の守護社
なり此所の氏神にして九月二日と
飛鳥路笠置の小十余町ばかりあり南山小ふもとをまわり
夜話せりくさ今ふもとを置の里と唱ふ所ふ城大和
大河原有市飛鳥路の北にあり二条ま
伊賀へ等の國境にあり